ジュディハピ！

田中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジュディィハピ！

【Ｎコード】
Ｎ６７５８Ｘ

【作者名】
田中

【あらすじ】
イケメン達を乙女ゲー感覚で攻略していく逆ハー女を傍観する物語。主人公は逆ハー女ではなく脇役。『終わらない高校二年生』のループに気付いたことで物語への介入を強制されてしまう。偶に立つ巻き込まれフラグを全力でへし折っているつもりだけど成功したり失敗したり。ループを終わらせるためにコソコソ頑張る話。

設定　・　登場人物

□正式タイトル　＋　意味

Ｊｕｄｙ　Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ！　～　ＧａｍｅＣｏｕｎｔ　？？？　～

（ジュディ　ハピネス！　～ゲームカウント　？？？　～　略して『ジュディハピ！』）

Ｊｕｄｙ　－　それは甘い夢のような恋の世界に生きた女神の名前。

Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ　－　それは恋を求めた女神が輝く甘美な夢の舞台。

ＧａｍｅＣｏｕｎｔ　？？？　－　それは恋に溺れた女神が巡った世界のカウント数。

□概要

思考が残念な愛の女神が仕掛けた魔法を発動させた少女の逆ハー物語を傍観する物語。

主人公は逆ハー女ではなくクラスメイトＦくらいの超脇役。『いつまでも終わらない高校二年生』のループに気付いたことがキッカケで物語への介入を強制されてしまう。

イケメン達を乙女ゲー感覚で攻略していく逆ハー女を傍観しているけど、偶に立つ巻き込まれフラグを全力でへし折るのが主人公の日常。

しかしフラグは何時でも何処でも容赦なく立ち続けるので、何やかんやで色々巻き込まれたり巻き込まれなかったり。

■舞台

逆ハー女が発動させてしまった魔法により、1年間がループする事になってしまった学園が舞台。

学園の名前は『四季ヶ丘学園』。私立の金持ち学校なので通う生徒は基本的にブルジョワ。

生徒会、風紀委員会なる二つの組織が存在し、その地位と権力は教師をも凌ぐ。学園生徒の憧れの的。

■逆ハー女用便利システム

・手持ちの携帯電話により攻略対象者の簡易プロフィールをチェックする事が可能。

・手持ちの携帯電話により攻略対象者の好感度をチェックする事が可能。

・手持ちの携帯電話により攻略対象者の現在地をチェックする事が可能。

・手持ちの携帯電話により攻略対象者の攻略情報をチェックする事が可能。

・手持ちの携帯電話から危機的状況回避のため警告メールが通知される。

※プロフィール、情報の引き継ぎは可能だが好感度を引き継いでのプレイスタートは不可。

■クリア条件

・逆ハー女が飽きたら終了。

対象者全員を攻略してもプレイヤーが飽きない限り物語は終わりを迎えない。

・???

逆ハー女云々は関係なく、物語が終わりを迎える条件を満たせ

ば強制終了させることが可能。

◇主人公たち

・主人公　平田加奈子（ひらたかなこ）　（高二）

ループに気付いた事で物語への介入を強制されてしまった不幸な脇役主人公。

平凡な容姿で存在感が若干薄め。逆ハー女やイケメンに興味がないのでループが終わる事を切に願っている。

わりと裕福な家庭に生まれているが学園内では庶民寄りに分類される。

趣味や特技はこれといったモノがなく、ぼんやりして一日を過ごすことがよくある。

・逆ハー女　姫川愛華（ひめかわあいか）　（高二）

愛の女神の魔法を発動させた、通称『逆ハー女』。二年の四月下旬に転校してくる。

魔法の補正により超絶美少女化しただけでなく頭脳明晰、運動神経抜群というチートになった。

既に複数のループを経験したためイケメンにチヤホヤされるのが当たり前だと思っている。

とりあえず逆ハーレムエンドを迎えるまでは飽きる予定がない。

補正により学園理事の血縁者という設定になっている。趣味や特技は色仕掛け等々。

◆攻略対象者

生徒会

・一宮蓮（いちのみやれん）　（高三）
生徒会会長。黒髪に紅目をした美形。性格は横暴で自分が一番でないと気が済まない俺様。
世界的に有名な財閥の跡取りらしい。腹違いの弟と妹が一人ずついる。

・二宮玲（にのみやあきら）　（高三）
生徒会副会長。金髪碧眼の美青年。物腰柔らかい王子様に見えて中身は腹黒。日英ハーフ。
ジュエリー業界では名を知らぬほど有名な企業の次男。

・三宮穂高（みつみやほだか）　（高二）
生徒会会計。ふわふわウェーブの茶髪に茶目のイケメン。見た目通り性格もチャラく女関係がだらしない。
大製薬会社の末っ子。姉が四人いて長女が既に跡を継いでいる。

・五宮伊織（いつみやいおり）、伊吹（いぶき）　（高一）
生徒会書記と庶務。伊織が書記で伊吹が庶務。
茶髪緑目のイケメン双子。見た目がそっくりで親でも見分けがつかない。悪戯好きで愉快犯。
和洋菓子会社の子息。どちらが跡取りかは決まっていない。

・六井湍（むついはやせ）
生徒会顧問。明るい茶髪に黒目の美形。どこからどう見てもホスト。担当教科は数学。

風紀委員会
・七瀬正臣（ななせまさおみ）　（高三）
風紀委員会委員長。焦茶の髪と瞳に銀のフレーム眼鏡。デレの

見えないツンデレ。むしろツンツンツン。デレは出張中らしい。

・八瀬楓（やつせかえで）　（高二）
風紀委員会副委員長。ハニ―ブラウンの長髪と瞳。女顔の美少年だけど性格は漢。『可愛い』は禁句なのでウッカリ言うとフルボッコ。

・九瀬弦（くぜゆずる）　（高一）
風紀委員会所属。赤茶髪に琥珀の鋭い眼。どこからどう見ても不良。口より先に手が出るタイプだが口も悪い。

・十倉誠二（とくらせいじ）
風紀委員会顧問。オールバックの眼鏡教師で規則に厳しい。担当教科は歴史公民。

その他

・四宮???
一定の条件をクリアすると登場する隠しキャラ。
欠番四のため、生徒会の関係者であることが想定されるが逆ハー女が未攻略のため詳細不明。

・???
一定の条件をクリアすると登場する隠しキャラ。逆ハー女が未攻略のため詳細不明。

・???
一定の条件をクリアすると登場する隠しキャラ。逆ハー女が未攻略のため詳細不明。

◆その他の登場人物

・浅野絵理（あさのえり）　（高二）
主人公の友人。

・小椋詩織（おぐらしおり）　（高二）
主人公のクラスの学級委員長。三つ編み眼鏡の真面目キャラ。逆ハー女の世話役にされてしまう。

▼豆知識

・生徒会、風紀にてある程度の地位を持つには『数持ち』でなければならない。
『数持ち』とは文字通り名に数の入る家柄出身を指す。

プロローグ

それは現代と呼ばれる世界より遥か昔の話――。
神や天の使者が世界の中心だった時代に、多くの者に愛されたいと願った美しい女神が居た。

女神の名は『ジュディ』。
美しい容姿と優しい心で万人に惜しみなく愛を与える役目を持つ愛の女神。
ジュディは愛の女神の名の通り、愛を与えるべき人々を慈しみながら日々を過ごしていた。
ある者が涙すればジュディは慈しみの言葉をかけ、ある者が嘆けば己での愛でその者の全てを包んだ。
そんな風に美しく優しい愛の女神を人々だけでなく、天界の神々も誇りに思い真の愛の女神だと信じていた。

――だがある時、ジュディは美しい自分に向けられる恋慕という名の愛に気付いた。
愛を与えるという職務を繰り返す内に、最初は与えられた愛に喜んでいた者が何か別の感情をもって自分を見ていることに、ふと気付いたのだ。
ジュディの容姿と心に虜になった者は多く、ジュディは次第に己が他の誰よりも美しいのだと日々思うようになった。
ジュディが微笑めば相手の頬に朱が差し、ジュディが囁けば相手の心を高鳴らせた。
それを確信したジュディは、どんな愛をどんな者に送ればよいかを考えていた思考を消し去り、どんな仕草をすれば好意を持たれるのか、どんな言葉をかければ相手の心に響くのかを考えるようになな

った。
与えていたはずの愛が恋慕という最高の形で還されていることにジュディは狂喜し、愛す立場から愛される立場に在ると思い立った。

そしてジュディはいつしか、それを利用して虜にした眉目秀麗な者だけを侍らせ甘美な空間で暮らし始めた。
万人に注ぐ愛をその者達だけに与え、万人に向けるべき愛を惜しんで神の職務を怠けた。
そうやってジュディの世界は望むままに美しく輝き、望むままの時を刻んだ。

そんな風に愛する世界で美しい者達に囲まれたジュディは、その世界を閉じ込めて『永遠の箱庭』を作ろうという考えに行き着いた。
愛する世界に愛する者達を閉じ込め己を永遠に愛すだけの小さいけれど大きな欲に溺れ切った、ジュディにとっては愛に溢れた美しい世界を。他者にとっては欲に溺れた醜い世界を。

しかし、やはりジュディの行動は多くの神と天の使者の怒りを買った。
神々は欲に溺れたジュディから虜にした美しい者達を解放し、神の資格を剥奪した。
だがそれに納得できなかったジュディは己への愛を還せと憤怒し、女神だった頃の面影を消し去って醜く傲慢な姿を天界に晒した。

神々はそんなジュディを哀れに思い、涙した。
その容姿に見合った清く美しい心で愛を囁き、惜しみなく注ぐ女神の姿が何処にもないことに失望した。

――神は神を殺せない。
創造すべき神から死を生み出せないという天界の法則に従い、神々は何重もの鍵をかけた小箱にジュディと醜い欲を封じることを選択した。

――赦さない…！　私の愛する世界を消してしまうなんて、絶対に赦さない！！

小箱に封じられる最後の最後で放ったジュディの言葉は、蓋を閉じる神々には聞こえなかった。
光ある世界から真っ暗な小箱の底に封じられる寸前に絞り出すようにかけたジュディの魔法を、堕ちた愛の女神に顔を背けた神々は気付くことができなかった。

そして時は流れ、退屈な日常に刺激を求めた一人の少女、姫川愛華が偶然にも女神の小箱を手に入れたことで愛と欲にまみれた物語が始まりを告げる――。

デジャヴ

「今日から高校二年生だね！」

その事実に気付いたのは、校門で会った同級生の一言だった。

高校二年生の春休みが終わり、ついに受験や就職を控えた最終学年への初日だと思って登校した私――平田加奈子（ひらたかなこ）――へ告げられた、何気ない一言。

普段の私なら適当に相槌を打って妙なボケを聞き流すはずだが、それはできなかった。

なぜなら、私はこのやり取りに覚えがあるからだ。更に言えば感覚的には丁度一年前のはずがフラッシュバックしてくる記憶の数は約十回。

サーっと全身から血の気が引き、混乱する頭で必死に考えた。浮かんでくる複数回の記憶は数分の時間の違いや仕草が違う等の誤差があっても、すべて同じ結果を導き出していく。

……――私は『高校二年生の初日』を知っている。

デジャヴと呼ぶべき私の状態に気付いた様子のない彼女は軽い足取りで先に門を過ぎていくが、その逆で私の足は行き交う人の邪魔になりながらノロノロと進んだ。

この先に張り出されている新しいクラス発表を見に行く彼女の背にも見覚えがあり、私は淡々と記憶の中で自分や彼女の何組を知っていた。

そう、私は今日に限らず『高校二年生の一年間』を知っているのだ。

――やったね、私達二人とも二年二組だよ！

笑顔で駆け寄ってくる彼女が、後に彼氏となるクラスメイトと肩をぶつけ合ってしまう、ほんの先の未来。正確には過去。私の中にだけ残る記憶。

「やったね、私達二人とも二年二組だよ！　また同じクラスで――……きゃぁ！」

「うわっ、ごめ、大丈夫か！？」

ほら、記憶に残る映像の通り。

ペコペコと互いに頭を下げている二人を眺めて、微かに震えた手を強く握りしめた。この場で別れても教室で再び顔を合わせる二人の反応さえ、鮮明に浮かんでくる。

冗談だろう、と笑い飛ばしたくなった。

鮮明に残る記憶は私が見た夢に違いないと思いこみたくなった。

けれども、互いに好印象で手を振って別れる二人を見ていると記憶が間違いでないことを証明されているようで、途端に泣き出したくなった。

ああ、誰かが私のおかれている状況を否定してくれないだろうか。

澄み渡る青空を大袈裟に仰ぎながら、この時の私は自分が繰り返される日常の中に居るという、脳裏に浮かんだ非現実的な状況を必死で否定していたのだった。

だって、それはまるで絵空事のようだから――。

（繰り返される生活に、なぜ私だけが気付いてしまったのだろう）

一　2

身に覚えのある感覚を味わいながら、私は何度目かになる二年初日の教室に居た。

すっかり見慣れてしまっている光景にも関わらず、周りは新鮮だと言わんばかりの空気を溢れさせている。

チャイムと同時に教室に入って来た担任を見て、女子が嬉しそうな声を上げるのも知っていた。

学園で一、二を争うほど人気のある教師、六井湍（むついはやせ）先生がブランドもののスーツに身を包んで登場したからだ。

湍と書いてハヤセと読む珍しい名前を本人は気に入っていると専らの噂だけど、特定の人にしか呼ぶ事を許さないと聞いたことがある。

誰にどんな基準で許容しているのかは分からないけど、顧問をしている生徒会の役員と風紀委員が先生の名前を呼んでいるのは確認済み。けれどそれ以外は知らない。正直に言ってしまえば、先生の名前なんてどうでも良かったからだ。

それでも繰り返した記憶の中では、数多くの女子生徒や女教師が六井先生の名前を呼ぼうと意気込んでいた姿があった。

そして、誰もがことごとく却下されて先生の機嫌を著しく損ねていた結果になっていたはず。

――……その中で、たった一つの例外があるとすれば――。

「おい平田。二年の初日から随分な態度だな」

「っ……！」
「まさか俺の話を聞いていなかった、なんて言わねぇよなぁ？」

記憶を辿ることに集中していた私の前には六井先生の姿があった。真新しい出席簿を持って自分の肩を叩いている先生は、初日から問題児を見つけて面倒だと語るような目をしていた。

これはマズイと焦った私は慌てて立ちあがり、先生と交差した視線を俯くことで下に移した。

それでもぐるぐると回る頭の中で考えるのは『以前』の情景。確か、ここで先生の話を聞かずに注意されるのは男子生徒だったのに——何故か私にすり替わっている。

考える事に必死で、傍目からはぼんやりしているように見えた私にターゲットが移ったということは、恐らく私が『以前』と何か別の行動することで多少の変化が生じてしまうのだろう。

「話を聞いていたなら、何を言ったのか答えてみろ」
「あの、き、『今日は講堂での集会だけなので早く移動するように』と、えっと、『生徒会と風紀委員の発表があるが騒ぐんじゃねーぞ』と、『生徒会顧問である俺への拍手は盛大に』です」
「……なんだ聞いてるじゃねーか。具合でも悪いのか？」
「よ、よくボンヤリしてると言われるので」
「なるほどな。だが変な誤解されねーように今後は気を付けるように」

何度も耳にした先生の言葉を思い出しながら答えた私を、先生は手にしていた出席簿でパコっと頭を軽く叩かれた。

これ以上私に用はないとばかりに教卓へ戻っていく先生の背を眺めながら、小さく息を吐く。

知っているようで、微妙な変化のあるこれから先の未来を思うと憂鬱で仕方なかった。

何故私が、何故私だけが、お願いだから悪い夢であって欲しい。と願っても、誰も答えてはくれない上に現実だから夢も覚めない。

（もし私がこれから先の未来（いちねん）を知っているというなら……）

私が気付いた一年目は様子見に徹底する、と静かに自分の中で結論を出した。

この一年で何が起こるのか情報を収集し、再び巡るかもしれない一年に備えると決めた。もしかしたら次の一年は巡らないかもしれない。

「じゃあこれでＨＲは終わりだ。委員長」

「き、起立っ、礼！」

いつの間にか、見た目だけで先生に指名された委員長の号令に従いながら頭を下げる。

意外に冷静な自分に驚いてしまうけれど、微かに震える手足を見てやはり落ち着いないのだと改めて思った。

（だって、心の中の私は『夢なら早く覚めて』と何度も叫んでいたから――）

報告します

結論から言ってしまうと『高校二年生の一年間』は再びやってきた。

ループしている一年間はほぼ私の記憶通りで、情報を集めるためにある程度の行動を起こしても大差はなかった。

何か利点を上げるなら、繰り返す事で高校二年生の授業では困らなくなった事だろうか。テスト範囲も出題される問題も同じなので律儀に勉強した私の知識が必然的に深まっただけ。

けれど私は自分に訪れる変化が怖くて試験では適当に間違えて中の上あたりの成績をキープしている。大差ないと言っても、やはり知らない一年（みらい）は怖かったから。

ループしている事実に混乱しなかったのか、って？

そんなの、繰り返される高校二年の初日に自宅へ帰ってから泣き喚いた事で『泣いてもどうにもならない』と悟れたよ。

……まぁ、今は私の話はどうでも良いので置いておこうかな。

情報収集に徹底すると決めてからの一年で、ひとつ確実だと断言できる事がある。

わたしが巻き込まれている『高校二年生の一年間』の主役――姫川愛華――のことだ。四月末という中途半端な時期に私と同じクラスに転入してくる美少女で、学園の人気者達から次々とアプローチをかけられお姫様のような扱いを受ける子。

彼女、姫川さんは良く言えば天真爛漫で、悪く言えば宇宙人だった。

姫川さんと学園についてまとめたノートがあるから、ちょっとページを捲ってみよう。
ここから先に綴られている物語は、私が実際に見て来た一年間だから信じられなくても目を背けないで欲しい、な。

（書いた本人である私は背けたくて仕方がないけれど）

（……そう言えば。）

（繰り返される一年が再びやって来ても、このノートが消えなかったのは何故だろう？）

日記（四月）

ノートの一ページ目は滲んだ文字で始まっていた。

『とりあえず落ち着くために日記を書くことにした』と。それからの数日は記憶と変わらない日常に怯える言葉が綴られており、必ず文末には『帰りたい』とあった。

一体何に帰りたいのか。冷めた気持ちでパラパラとページを捲る今の私には当時の私の弱々しい心を理解できない。

そしてついに、物語の主人公が現れたことを綴るページに差しかかった。

▼　四月の日記

四月〇日　（はれ）

今日は朝から学園中が騒がしかった。

原因は四月の下旬と言う中途半端な時期に転校生がやって来たからだ。

転校生は私と同じ二年二組。名前は姫川愛華さん。容姿端麗で本当にお姫様みたいな人だ。

担任の六井先生もすごく気に入っているみたい。だって自分の名前を姫川さんに呼ばせていたから。

嫌そうに騒ぐ女子を無視して教室内でイチャイチャし出した二人に私は思った。

そういうことはホテルでやれ、と。その後、姫川さんは学校に不慣れということで学級委員長の隣の席になっていた。

姫川さんの容姿に騒ぐ周りの男子や睨む女子に先生は『俺の愛華

に手を出すんじゃねーぞ』と言っていた。
どうした先生。まさか遅い春がやってきたのか。そして真っ赤になって怒ってる姫川さん、見た目はマジ天使だけど何かわからんが超ウザイ。
ああ、何だか今日という日を境に学園が騒がしくなる気がする。
早く帰りたいなぁ。

四月×日　（はれ）

今日も朝から学園中が騒がしかった。
原因は昨日転校してきた姫川さん。噂によると姫川さんは生徒会副会長の二宮玲（にのみやあきら）先輩と仲が良いらしい。
転校してきた姫川さんを理事長室まで案内したのが副会長だとか。何でも、姫川さんは理事長の親戚らしい。職権乱用かよ理事長。
しかし、私にはどうでもいいことだけど副会長ファンの女子は気に入らなかったようだ。
姫川さんが登校するなり、数人で姫川さんを囲んで文句を言っていた。何これイジメ？
と思っていたら学級委員長が『転校したてで学園のルールを知らないだけだから、ね？』と言って一生懸命姫川さんを庇っていた。
わぁ委員長って大変だよね。変な風に飛び火しなけりゃいいけど。
その後、『わたしと玲先輩は友達だもん！』と言った姫川さんはマジＫＹだったけどね。
委員長の必死のフォローも水の泡。姫川さん超ウザイ。あーあ、帰りたいよぉ。

四月△日　（はれ／くもり）

なんてこったい。どうやら副会長はM属性を持つ人だったらしい。どこから仕入れた噂かは不明だけど、副会長が姫川さんを気に入ったのは愛想笑いを『気持ち悪い』と言われた事が原因らしい。

理事長室まで案内してくれている副会長の笑顔を見て、『その社交辞令の笑顔……とても気持ち悪いので止めてください』と言ったそうだ。

何それ超失礼。社交辞令とか当たり前だし。どう考えても恋の花咲くポイントじゃないよね。

しかし何故か副会長は満面の笑みで姫川さんを抱きしめたらしい。M属性が確定された瞬間だ。

友人の絵理が『嘘の笑顔だとハッキリ言う人が嬉しかったんじゃない？』と言っていたが違うと思う。

きっとMの副会長は姫川さんの隠されたS属性に気付いたんだ。私にはよくわからん喜びだが、おめでとう副会長。

この噂が出回って、姫川さんが再び女子に囲まれていたけど慌てて走り寄った委員長を横目で見ただけで私は自分の席についた。相変わらず姫川さんは見ているだけでウザイ。

何か副会長をスタートとして生徒会とか絡んできそうな気がするけど、今は考えるのを止めよう。

あ。そう言えばもうすぐゴールデンウィークだ。早く帰りたいな。

▲　四月の日記はここで終了している

（……訂正。）

（ループに気付いた数日で私の心は既に荒みまくっていたらしいです）

日記（五月）

五月の日記は最初の方の日付がなかった。
休日中に体調でも崩していたかな、と思い返していた私の目に飛び込んできたのは休日明けの日付だった。

▼　五月の日記

五月〇日　（くもり／はれ）

いやぁ日記の存在をすっかり忘れてたわ。正確には姫川さんの存在を、だけど。
休日中に親戚のオジサマに財布の中身を潤わせてもらったから、久々に破格値の学食に足を運んでみたけど大後悔。時既に遅しってやつだね。
どうやら今日は姫川さんも食堂で学級委員長と一緒だったらしい。そしてそこへ滅多に食堂を利用しない生徒会の皆さんがご登場。
目的は副会長が夢中？になったと噂の姫川さんを一目見ることらしいけど、自分達がアイドル的立場なのを理解していて欲しいもんだ。
まぁ、そんな私の無言の訴えなんて彼等に届くはずもなく、副会長は素晴らしい笑顔で食事中の姫川さんのもとへ走り寄ったんですよね。『愛華！』なんて名前呼びで。
しかも姫川さんも『玲先輩！』なんて自分から抱き付くもんだから……はーい、ものすごいブーイングの嵐でございました。誰か耳栓ください。
更に副会長が姫川さんの頬にキッスするもんだから困った困った。

とりあえずココは日本だから挨拶はコンニチハで済ましておけよ。

で、更に更に面倒なことに存在を無視されていた他の生徒会メンバーが姫川さんに自己紹介を始めたんですよね。双子の書記と庶務にチャラ系の会計。そして最後に学園の生徒トップの会長サマ。

何を思ったのか、会長サマったら姫川さんの顎を掴んで無理やり上を向かせた後『気に入った、俺様の女になれ』だって。おま、リアルで自分のこと『俺様』なんて言う人初めてみたわ。危うく味噌汁噴き出すところだったよ。

もうそこから煩いの何のって。

まず最初に、怒った姫川さんが会長サマにビンタして一瞬食堂内が静まり返ったんだけど、『ますます気に入った』と会長がM発言。

次に『愛華ちゃんって面白いからお友達になりたいな！』と言う双子に『私達はもうお友達でしょう？』と姫川さん。どうやら姫川さんと言葉を交わせば強制的に友達のようだ。気を付けよう。

その次には『オレ達生徒会は多くの生徒（ファン）に公平でなくちゃならないから友達が少ないんだよ』という会計に姫川さんが『そんなのおかしいわ！ファンなんて、必要ないじゃない！』とＫＹスキル発動。

たぶん、友達になることに隔たりなんて不要！的な事が言いたいのだと思うけど今の発言は明らかに『ファンが邪魔』『ファンが悪い』という意味に取れてしまう。

実際、生徒会のファンだと公言していた生徒達からは怒声と鋭い視線が姫川さんに送られていた。

そして最後には『なんて心の優しい子なんだ』と声を震わせて感動している生徒会の皆さん。ぶっちゃけ私はドン引きでした。

ちょうど『シェフのお勧めＡランチ』を食べ終えた私には食堂はもはやカオス。

なので爆笑してヒーヒー言っていた絵理を連れて食堂を後にした。

絵理は明日腹筋が筋肉痛だと思う。
あ、そう言えば。あのカオスの中で学級委員長が顔を真っ青にしてたような気がする。ご愁傷様でした委員長。
財布も寂しい状態に戻ったことだし、明日からまたお弁当持参に戻ろうっと。帰れることが一番だけどね。

五月×日　（くもり）

昨日は食堂が鬼門だと思ったので通常通り教室で絵理と仲良く持参したお弁当を食べていた。
あの大騒ぎは最終的に風紀委員会が出動して何とか場をおさめて解散したらしい。
『一般生徒にあまり関わるな』と言った風紀委員長に姫川さんが物申したという場面もあったようだが、それ以上の情報は入ってこなかった。何故なら話を聞いている途中に再び騒ぎが起こったからだ。

あーらら不思議。昼休み開始時には消えていた姫川さんと学級委員長の姿が教室にあるではありませんか。
そして何故かその後ろには昨日食堂で見たメンバーが勢揃い。廊下側からの一般生徒の視線も熱い。何か一気に人口密度が上がって教室内の酸素が薄くなった気がした。誰か光合成しろ。

姫川さん達のやりとりに耳を傾けたところ、生徒会メンバーが姫川さんを誘いに来たらしい。
確かに姫川さんは美人だけど、こんな一度に男性陣を虜にしてしまうほど魅力的なひとなのだろうか。という疑問が私の中で浮かん

だ。
女子と男子では互いに『可愛い』と映る人物が全く異なると言うが、こういう場合を示すのだろうか？

『もうっ！私は親友の詩織と一緒に食べるって言ってるでしょ！？』……とか物思いの途中に耳に入ったけど、ないわー。姫川さんマジないわー。こりゃ男でも可愛いとは思わないっしょ？
いつのまにか親友に昇格してる学級委員長のこと、本当はどうでも良いって思ってそうだよね。だって今の発言で生徒会メンバーが委員長のこと睨みまくってるし。

結局、委員長も一緒に行くことで上手く（？）まとまって姫川さん達は食堂に向かった。
生徒会と風紀委員会しか使用できない特別席に座ったことが再び問題として噂されるのだけど、私には関係のない話だ。
とりあえず親友に昇格した委員長にならって、姫川さんをＫＹからＳＵＫＹに昇格させておこう。ＳＵＫＹとはスーパーウルトラ空気読めないの略であーる。なんちゃって。

五月△日　（あめ）

すっかり忘れていたけど、もうすぐ中間テストだ。
一度勉強したことがあるからと言っても油断したら大変なことになると思ったので、図書室に勉強しに来てみました。けど三秒で後悔。
何の悪縁なのか、最近すっかり見慣れた『姫川さんと愉快な仲間

達』が図書室で騒いでいるじゃありませんか。
マジありえねー。勉強できるはずねぇー。という事で何もせず図書室を去りました。

あれ。今思い返せば会計の姿がなかった気がするけど……気のせいかな。
たぶん他の場所で可愛い女の子とイイコトしてると思うけど。
そういえば風の噂で風紀委員会も徐々に姫川さんと接触を持ち始めたらしいね。
気になると言えば気になる話題だけど、とりあえず今日は勉強するかなー。

五月□日　（あめ／くもり）

テストとかで忙しくて日記を書いていなかったけど、今日はテストの結果発表だった。
上位三十名まで廊下に張り出される妙なシステムに私の名前は一度も載ったことはない。
ちなみに姫川さんは転校して来てあまり授業を受けていないのに学年三位だった。例のメンバーが褒め称えていてウザかった。
私はというと、もちろん今回も載っていない。だけど今日はテストの事で最悪な気分になった。

結果から言えば私の順位は三十一位だった。ギリギリ載っていない状態だ。
今までは七十位付近をフヨフヨしていた私の成績。それが三十一

位ということは、わりと良い上がり具合らしい。
正確に言えばループする一年間の最初のテストで加減がわからず、思いのほか良い成績だったという結果にすぎない。けれど、それは教師陣からは前向きに捉えてはもらえなかったようだ。

私の名字は平田。ハ行の二番目の『ヒ』。そして学年三位という輝かしい成績の姫川さんもハ行の二番目の『ヒ』。名前の順に席につくと私は姫川さんの真後ろの席になる。
――早い話が、姫川さんの答案をカンニングしたのではないかという疑いをかけられた。

長机とパイプ椅子しか存在しない生徒指導室に呼び出された私の前には担任の六井先生と風紀委員会顧問の十倉先生。
机の上には返却された私の答案用紙と、恐らく本人には内緒でコピーした姫川さんの答案用紙が散らばっていた。
一度、過去に受けたテストをループする事で再び受けているのだからズルをしていないとは言えない。でもこれは酷いと思う。間違っていると思う。

学年三位になる姫川さんの数個の間違い個所と、決して少なくはない私の間違い個所が重なる偶然なんて当たり前と言っても過言ではない。
それなのに、この二人は最初から私がカンニングをしたと決めつけている。否応無しに反省文を書けと言っているのが何よりの証拠だ。

もちろん私は否定した。けれど『こんな奴の近くに座った愛華が可哀想だ』とか『今後のテストで対策を考える必要があるな』と零した二人に対して怒りで目の前が真っ赤に染まった。
六井先生は軽い所があるけど意外に生徒思いな面のある良い先生

だと思っていた。十倉先生は言葉は厳しいけどその人の事を考えていることが分かる良い先生だと思っていた。

それが、たった一人の女のせいでこのザマだ。姫川さんの輝いている部分しか見ておらず、本質的な部分を全く見抜けていないくせに全てを理解して守ってると思い上がっている最低な男が二人。

ぼやけた視界の先に存在する二人の教師を、慕っていた自分が馬鹿らしくなった。声にしても伝わらないことを、これ以上どうすれば良いというのか。

悔しくて悔しくて、たまらなくなって、私は自分の答案用紙と反省文用の原稿用紙を引っ掴んで生徒指導室を飛び出した。私を追うようにして聞こえてきた声は届いていないフリをして――。

この日、私は自分が終わらない一年を繰り返していることを心の底から嫌になって廊下を全力で駆けながら声もなく泣いた。

はやく、かえりたい。

▲　五月の日記はここで終了している。

（私が流した涙の意味は私しか気付けないし、知ることはない）

（私が泣いた裏で笑っているのは一体ダレ……――？）

日記（五月）（後書き）

逆ハー女は、まんま王道ですｗ

日記（六月）

五月の日記が綴られた次のページを見た私は、思わず頬を引き攣らせた。

なぜなら、そこには六井先生と十倉先生の悪口がページの余白部分まで余す所なく極小の文字でビッシリと埋まっていたからだ。

……自分で言うのも何だけど、どうやら私はけっこう根に持つタイプらしい。

とりあえずカンニング疑惑をかけられた五月の続き、六月の日記を読んでみよう――。

▼　六月の日記

六月〇日　（どしゃぶりの雨）

六月の六という字は嫌いだ。何故なら口に出すのも腹立たしいホスト教師の名字の一部だから。

とりあえずあの先生と十の字がつく先生は湿気でジメジメしている廊下で転べばいいと思う。むしろ転べ。三回転ぐらいしてしまえ。

あのアホ教師二人に書くよう指示された反省文だけど『私は無実だ』という言葉を原稿用紙二十枚にビッシリと書いて提出しておいた。しかも二人分。つまり四十枚だ。

最初は書き直せと突っ掛かってきた二人だが、私が冷めた眼で三度ほど同じことを繰り返すと何も言ってこなくなった。ついでに言うと私は二人に挨拶すらしなくなった。目線も合わせない。存在ごと丸っと無視だ。

雨ばかり降っているので忘れがちだが、実は今月は体育祭がある。というか私は忘れていた。思い出したのは参加競技を決めるＬＨＲがあったからだ。

うちの学園は少し変わっていて体育祭は二日にわたって行われる。一日目は学園に慣れ始めた一年と他の学年が交流を深めるために何か催しを行う『交流会』。そして二日目が世間一般でいうところの体育祭だ。

確か交流会の内容が『校内鬼ごっこ』だったはず。一年全員が逃げる側で他が鬼役だそうだ。昼休みに絵理が教えてくれた。逃げ切った人や一定の数を捕まえた人には賞品が出るようだが面倒なので適当にサボろうと思う。

変わって体育祭の方だけど、私は借り物競走の補欠という事実上競技不参加の地位を勝ち取った。ジャンケンでチョキばかり出し続けていたら王者に君臨していた。チョキすげぇ。

ちなみに姫川さんは私が補欠になった借り物競走に出場するようだ。何だか嫌な予感がする。と書いた部分が『ウザイ予感がする』と見える私の目は視力が少し落ちたのだろうか？

六月×日　（はれ）

嫌な予感もとい、ウザイ予感は見事的中した。

本日校内放送にて『二年二組、姫川愛華を生徒会専用チアガールに任命する』というふざけたお達しがあった。生徒会とか滅べばいいのに。主に六の字がつく顧問が。

放送後、当然のように教室に現れた例のメンバー＋風紀委員達が姫川さんを取り囲んで教室内が一気に騒がしくなった。
勝手に耳に入って来る話によると、『専用など許可できない』と言う風紀委員長の発言をプラス方向に受け取った姫川さんは生徒会だけでなく風紀委員も応援してさしあげるようだ。お優しいことですね。

チアの件は本人がノリ気のようで全く嫌がっていない。それどころか『皆が可愛いと思う子を集めてチアガール隊を作ろうよ！』とまで言い出した。
可愛い子、という単語に反応した生徒会と風紀委員は間を置かぬ早さで姫川さんの名を口にし、姫川さんはそれに対して『もうっ、私一人じゃダメでしょ！』と満更でもない顔で笑っていた。最初からコレが目的だったに違いない。うぜー。

それだけで終わるはずもなく、更にウザイと思ったことも起こった。
『あの子もチアに入れるつもり？』と学級委員長を見ながら言った風紀副委員長に姫川さんは『チアは可愛い子じゃないとダメでしょ？だから詩織には無理だよ』と。
……マジパネェな姫川さん。この間親友に昇格した委員長を真正面から『可愛くない』と宣言したよ。例のメンバー達は『その通りだ』と言って笑っているけど、他は誰も笑っていない。

おかしい。変だ。前から思っていたけど、姫川さんを囲むメンバーは異常だ。
こんな女の何処が魅力的なのか全く理解できない。まるで魔法にでもかけられたような酔狂っぷりに寒気さえ覚える。
ああ、恋ってこんなに怖いことなのだろうか。

六月△日　（はれ／くもり）

今日も今日とて校内放送が流れた。

『二年二組、姫川愛華は転校生のため交流会で逃げる側に位置づける。生徒会以外が捕獲した場合は捕獲者にペナルティを与える』だってさ。もうお前ら全員ホテルで悪代官ゴッコでもしてろ。

ついでに聞いた話によると、姫川さんが先日任命されたチアは競技に参加せず常に応援に徹するらしい。つまり補欠の私が必然的に繰り上げ出場ということだ。

もうホント誰か姫川さんを止めてくれませんかね。あーヤダヤダ。

六月□日　（くもり／あめ）

放課後、傘を忘れたので雨が小降りなってからダッシュで帰ろうと思いながら校内を徘徊していた私は最悪な場面に遭遇してしまった。

偶然前を通った女子トイレの中から怒声やら罵声やらが聞こえてきたのだ。十中八九、イジメ的な場面。

こっそり聞き耳を立てたところ中にいるのは生徒会＋風紀委員のファンの皆さんと姫川さんだと確認できた。水音が聞こえてきたので姫川さんに水を掛けているのだろうと推測。

どうするべきか悩んでいたら、バタバタと足音が聞こえてきたのでその場から離れた。再びこっそり様子を窺うと学級委員長が風紀委員数名を連れてトイレに突入していた。危ない危ない。下手をすれば見張り役をしていたのだと勘違いされていたかもしれない。

とりあえず当初の目的通り雨も小降りになったから早く帰ろうっと。

――後日、姫川さんを呼びだした生徒達が謹慎処分を受けたと聞いて、嫌な想いが胸に広がった。

六月●日　（はれ）

今日は交流会だったが、良いサボり場所をみつけることができて終了まで爆睡してやった。見回りの風紀にも見つからない絶好のスポットだった。

姫川さんはどうやら生徒会長が終了間際に捕まえたらしい。生徒会メンバーが姫川さんを捕まえれば何かご褒美がもらえる約束だったそうだ。

ま、どうでもいいか。

六月▲日　（はれ）

今日は体育祭だった。補欠から繰り上げ参加になった借り物競走は二位という結果に終わり、まあまあチームに貢献できた方だと思

う。

借り物のお題の中には『好きな人』等のアタリ（私にとってはハズレ）もあったようだが私が引き当てたお題は『水筒』だった。超無難。

同じ競技に出場していた生徒会の双子の片割れ（どちらかは不明）と風紀委員の不良っぽい見た目の人が似たようなアタリのお題を引いて姫川さんを取り合いしていたが、華麗にスルー。

他にも色々ウザイ競技があったけど、私には直接関係なかったので特に書くことない。今日は疲れたので早めに寝よう。

六月■日　（はれ／くもり）

六の字がつく最悪ホスト教師の授業で小テストがあった。期末テストが近いからだろう。

テスト中は私のことを監視しているようなので完璧に問題を解き、テスト用紙を裏向けて終了の合図があるまで二度と用紙に触れなかった。

逆に余りまくった残り時間中ホスト教師をガン見してやった。暫く目線を合わせていなかったのでホスト教師は少し戸惑っていた。ざまーみろ。

▲　六月の日記はここで終了している。

（名前すら記述されない二人の教師も、美を詰め込んだようなお姫様に未だ夢中）

（彼等を含め、魅了された者は気付かない。周りが自分達をどんな目で見始めているのか――）

日記（七月）

私は自分に害が無ければ情報を記入しないどころか日記すら書かない自分に苦笑した。

一カ月は約三十日あるのに毎月の日記は数日分だ。それだけ平和な日々を送れるのだと安心すべきか情報が少ないと危機感を募らせるべきか。

……だけど、この日記を書いている時の自分は前者でも今の私は後者だった――。

▼七月の日記

七月〇日　（はれ）

明日からテストが始まる。

前回のテストでは非常に嫌な思いをしたので今回のテストでは通常通りの順位に戻そうと思う。

やはりカンニングしていたのではないかと言われる気もするけど、ヤケになって良い成績を取るのも変に目立つことへ繋がるので回避する道を選んだ。

それに、私が知らない未来を自分で作り出すのはある意味博打に近い。知っている未来に近ければ近いほど私は安全に過ごせるのだから、わざわざ危ない橋を渡る必要なんてないのだ。

というわけで、最後の復讐を兼ねて図書室にやって来たわけですが即退室しちゃいました。

理由はもちろん、無駄に騒がしい図書室と美形ばかりのメンバーです。お前ら皆頭良いんだから図書室来るなよ。家に帰って寝てろ。

なんて私が思っても意志が通じるはずもなく、私の方が家に帰って寝ることにした。何か一気に疲れたからもう勉強とかいいや。

あ。そういえば帰る時に校門のところで会計を発見した。今日は珍しくあのメンバーの中に居なかったようだ。気付かなかったけど。

七月×日　（はれ）

期末テストが終わって数日が経過した。返却された答案に記された点数はほぼ予定通り。この様子なら元の七十位付近に戻れるだろう。

と思って余裕をかましていたら、中間テストに続き今回も生徒指導室に呼び出された。室内にはホスト教師と風紀のインテリ眼鏡教師。そして机の上には私の答案用紙。何このデジャヴ。

刑事ドラマの再放送を早く帰って見たい私がチラリと視線を送ってみると、それを合図に目の前の教師二人がいきなり『何だこのテストは』と言ってきました。意味わからん誰か説明してくれ。

ウザイなー、と思いながら話を聞いてみると二人は私の点の取り方が気に入らなかったようだ。

まぁ、何となく言いたい事は分かった。何故なら私は中間テストでの疑いを晴らすために『正しい解答』しかテストに記入していないからだ。

だからと言って私が満点を取ったわけではない。――つまり、私はある一定の点数が取れる問題にしか解答を記入しなかったのだ。

残りはすべて未記入のまま。問題に手をつけた形跡すらない。
〇と×が混在する私の答案用紙をよく見れば、子供でも気付く不自然な点。それが二人の癪に障っているらしい。

『君ならもっと上位が狙えただろう』と眉根を寄せるインテリ眼鏡教師を鼻で笑いたくなった。少し成績が上がればカンニングだ何だと疑っていたくせに。

『小テストは全て満点だったはずだろ』と苦い表情をしているホスト教師を殴りたくなった。それはカンニング疑惑を晴らすためにアンタの監視下で私が積み重ねた努力であって、好成績をおさめるためのものではない。

自分達が中間テストの時に私に対して何を言ったのか、何をしたのか、忘れたのかと罵声を浴びせて罵りたくなった。

けれど、何事も先に怒った方が負けだと私は知っている。だから私は言ってやった。自分が出来る最高のニッコリ笑顔で二人に告げてやった。

『私、姫川さんの答案をカンニングしたんです』、と。

七月△日　（はれ／くもり）

テストの結果も発表され、あとは夏休みを待つだけになった。
姫川さんは前回と同じ学年三位で、私は予想通り七十位という理想的な順位。
未だに六と十のつく教師二人が妙な視線を送ってくるが今日も華麗に無視を決め込んでます。

生徒指導室での一件は言葉を失った二人を放置して私が帰宅したので有耶無耶のままだ。意外なことに、二人は私の挑発に乗らなかった。

もちろんカンニングの事は嘘だ。

私が自分の解答用紙に答えを記入し終え、用紙を裏返してから終了の合図があるまで指一本触れていないことは試験監督を担当した他の教師が証人になる。

それは特に私を注意深く監視していたあの二人にも言えることで、私が姫川さんに視線を向けなかった事を誰よりも断言できるはず。

上手くいけば、個人的な感情を介入させまくっている二人の教師とウザイ姫川さんに矛先が向くと思ったのだけど……そう簡単にはいかないらしい。

まぁ、私は自分のカンニング疑惑さえ晴れれば満足だから別にいいや。テストの件はこれで終わりにしよう。先生達のことは無視し続けるけどねー。

七月□日　（はれ）

今日は一学期最終日。

清々しい気持ちで締め括りたい、と思っていたのだけど希望は叶わなかったようだ。

夏場はゴミの腐敗が早いので勘弁してほしい。どうやら生徒会＋風紀委員のファンのイジメが夏休み開始直前に復活したらしい。

原因は恐らく先日のアレだ。

日記をサボっていたから書き忘れたのだけど、数日前に例のメンバーが教室にやって来て姫川さんの夏休みの予定を聞いていた件だ。

各自が所有する別荘に誘って来る中、『私一人だけなんて、無理だよぉ』と頬を染めながら言う姫川さんは果てしなくウザかった。

最終的に生徒会長の別荘に全員で遊びにいく事になったらしいが、それが再びイジメの火種を大きくしたようだ。そしてそれは、巻き込まれた学級委員長にも飛び火する形になると思う。

実際、下駄箱や机に生ゴミを入れられたのは姫川さんではなく学級委員長だった。

朝早く登校する委員長は姫川さんが登校する前に全部片付けてしまうので、姫川さんは気付いていないようだったけど。

アレだ。本人へのイジメが無理なら周りに害を与えていく巻き込まれ型のパターンだ。これ、二学期には確実におおごとになるよね。

相変わらずの美貌で幸せそうに笑う姫川さんの傍らで、苦笑しか零さない委員長をみて私の方が溜息を吐きたくなった。

七月●日　（はれ）

今日から楽しい夏休み。何が楽しいかって、あの濃いメンバーに会う事がないからだ。

文明の利器であるクーラーがよく働く涼しい部屋でダラダラする予定だった私が、絵理の片恋相手（＝未来の彼氏）の練習試合を見に行きたいという申し出に簡単に頷いてしまうくらいには機嫌が良かった。

しかし、いざ試合会場に行ってみて大後悔。
絵理は未来の彼氏の元へ差し入れに行き、炎天下のなか私は一人熱気の立ち上がる観戦席でボッチ状態。
ルールもよく分からんので敵味方関係なくノリで拍手するしかなかった。いつまでたっても帰って来ない絵理に一言だけメールを入れて、その日私は寂しく一人で家に帰った。

もう二度とスポーツ観戦になんて行くもんか。やっぱりクーラー最高。

七月▲日　（はれ）

コンビニでガリガリちゃんを買った。うまかった。

七月■日　（くもり）

部屋のクーラーが壊れたので絵理の家にお泊り。お土産にガリガリちゃんを１０本持参した。うまかった。

七月◎日　（はれ）

絵理とプールに行った。売店で買ったカキ氷はイマイチだった。
お泊りは本日で終了なので渋々家に帰るとクーラーが直っていた。
どうやらリモコンの電池切れだったらしい。業者の方、わざわざ申

し訳ない。
しょんぼりしながら冷凍庫を捜索するとガリガリちゃんが出てきた。うまかった。

その日の夜、お腹をこわした。暫くガリガリちゃんは控えようと思います。まる。

▲　七月の日記はここで終了している。

（思わず日記帳を床に叩きつけてしまったのは仕方が無い、よね？）

日記（七月）（後書き）

友人の彼氏は野球部の設定です

日記（八月）

思わず床に叩きつけてしまったノートを拾って、私は腰かけていた椅子に座りなおした。

今のところ有益な情報を手に入れるに至っていないけれど、今の私が姫川さんを重要人物だと認識しているのだから日記から何かヒントを得られるに違いない。

一学期は自分に起こる変化で精一杯だっただけ。

きっと夏休みを機に、重要な何かに気付くはず――……だと思いたい。

▼　八月の日記

八月〇日　（はれ／くもり）

絵理から電話があった。緊急連絡網で都合のつく生徒は明日学園に集まるように、との指示が回っていると。

絵理の名字は浅野だから女子の連絡網のトップ。ホスト教師から直接告げられたから間違った情報ではないだろう。

何でも裏では理事長も絡んでいるとかいないとか。あ、何か嫌な予感しかしない。

八月×日　（はれ）

私の嫌な予感は高確率で的中していると思う。

指定された時間に講堂へ集まった私達を出迎えたのは、何故かコスプレ?をしている生徒会と風紀委員だった。
ザワザワし出す生徒達を講堂の席へ座るよう促す副会長の対応は手慣れたもので、やはり人の上に立つだけはあると少し感心した。
が、そんなのは舞台脇からマイクを持って登場したコスプレ?姿の姫川さんを見て吹き飛んでしまった。

微かにブーイングを起こす女子生徒を会長が一喝し、当然のように会長の隣に並んで姫川さんが集会の主旨を説明し始めた。
何でも、発案者は姫川さんで期末テストの日程と重なってしまった七夕を今からやろうというモノだった。
そこで姫川さんと例のメンバーを見て気付く。全員、織姫と彦星の姿なのだと。オイこら彦星何人いるんだ。

『恋って本当に素敵なことだと思うの。みんなは恋してる?』と姫川さんが電波なことを言えば彦星達は『俺様の気持ちをしっていて、そんな事を言うなんて……お仕置きして欲しいのか』とか『僕の心は織姫のモノですよ』とか返している。
そこで相変わらずKYスキルを発動させる姫川さんが『私もみんなの事が大好きだよ?』と笑顔で言い、彦星達は苦笑いをした。

おーい、頭大丈夫ですか姫川さんと彦星コスプレの男性陣。私を含む生徒達のドン引き具合を少しは気にして下さいよホント。
たぶん姫川さんにメロメロな男達は姫川さんが自分に寄せられる好意に鈍いと思っているのだろう。絶対演技だろうけど。あと姫川さんお祈りポーズでのマイク両手持ちは止めて下さい。何か腹立つんで。

この先まったく話が進みそうになかったので、私は隣に座っていた絵理に帰ることを告げて講堂を後にした。

一人で帰るのは目立つが、実は私のような生徒は少なくなかった。制服のスカートが乱れるのも気にせず早足で帰っていく多くの女子生徒達。

わりと優等生の絵理を巻き込まないようにしたつもりだけど、これなら一緒に帰っても良かったかもしれないと思いながら辺りを見回すと、何故か不思議なことに男子生徒の姿が全く無いことに気付いた。

たまたまタイミングが合わなかっただけかもしれないけれど、……何だか妙な印象を受けた。

で、ここから先は絵理から聞いた話。

あの後、それぞれが満足するまで舞台上でイチャついた例のメンバーはグダグダの七夕劇を演じたらしい。

織姫と彦星を引き裂こうとする者を排除し、織姫が幸せに笑っていられるような夢の楽園で末長く幸せに暮らしたという物語の結末に、女子生徒の多くはヒソヒソと陰口を叩いていたそうだ。

夜は夜で学園側が用意した巨大な流しそうめん機（？）で姫川さんを中心としたメンバーが非常に楽しまれたそうな。

あああ、やっぱり早く帰って良かった。疲れ切った顔の絵理を見てそう思った夏の夜だった。

八月△日　（くもり）

夏休みも残りわずかの本日、絵理から妙な話を聞いた。

生徒会＋風紀のメンバーが家の都合で日本から離れている数日間

に、姫川さんは複数の運動部の臨時マネージャーを担っていたのだとか。

姫川さんは親戚である理事長から正式に頼まれたようだが、人手が不足しているようには思えない部活動ばかりだ。

どうしよう。片恋相手のことを心配している絵理と同じくらい、私も得体の知れない大きな不安を感じたなんて誰にも言えない。

八月□日　（あめ）

降水確率百パーセント。私の嫌な予感的中率も百パーセント。

おかしなことに、私の周りで夏休み終盤に入って破局するカップルが急増した。私の周りで、というより男側が学園に通う者であるという嫌な共通点があった。

別れる時に、みんな決まって『好きな子ができた。彼女以外を愛せない』と告げるらしい。更に妙なのが、恋人がいない男子生徒も決まって同じことを周りに告げている点だ。

ヤバイ。何かわからないけれど、とにかくヤバイ。

とりあえず今日は片恋相手の恋愛相談を受けた事でボロボロに泣いている絵理を慰めることに専念しよう。

――絵理の片恋相手の様子も、噂と違うところなんてなかった。

八月◎日　（大雨）

夏休み、最終日。

『俺、姫川さんの事が好きみたいなんだ』。

片恋相手から絵理に告げられた最悪な一言が、私をも最悪な世界に突き落としてくれた。

▲　八月の日記はここで終了している。

「――これ……、痛っ！？」

八月の日記を読み終わった瞬間、酷い頭痛がして私は自分の頭を両手で必死に押さえた。

そうすることで痛みが治まるわけでもないのに、それ以外の行動なんて出来ないくらいの痛み。

ぎゅっと瞑った目の奥でチカチカとしながら目まぐるしく変わる『何度もループしている一年間』。

姫川さんを取り囲むキラキラとした世界がある裏に、筆で乱雑に塗りつぶされたような隠れた風景もあった。

知らないけれど、知っている。知っているけれど、何故か知らなかった過去。

過去を覚えていると思っていた私の『記憶』は実は不完全なもので、今この瞬間に再び巡った映像が本物なのだと――漠然とした頭の中で思った。

たった一巡前の記憶すら残った日記を読み返さないと取り戻せないほどに強力な、何かが邪魔をした本当の記憶――。

「え？　あれ？　な、何で私、こんな重要なこと、今まで忘れて……？」

（――もしかして誰かに、何かに、強制的に記憶を奪われていた……？）

（この先の日記を読み返すのが、何故かとても怖くなった）

日記（八月）（後書き）

急展開！（＊、・∀・）≡〇☆）。д。）））ブハッ

二年目を巡る『私』へ

九月の日記が書かれる前のページに、こんなメッセージが残されていた。

▼『私』へ

初めに、ループに気付いた二年目でこの日記を目にするであろう『私』に謝罪と忠告を。

読んでの通り一学期分の日記は何の役にも立たないと思う。ごめん、せっかく日記を頼りにしてくれたのに。

でも覚えていることの全てがこの日記を読んでいる『私』に起こる全てでないことを忘れてはいけない。現に私は自分の記憶に存在しない、ある意味最悪の一年を過ごしているのだと考えているのだから。

もしかするとこの日記はループに気付いた二年目を巡る『私』に届かないかもしれないけれど、残さずにはいられない『一年目の私』の過ちと決意を知っておいて欲しい。

無駄に終わるかもしれない一年目だけれども、私なりに姫川愛華について調べてみようと思う。二年目以降の『私』に迷惑がかからないよう、接触を避けての調査はあまり進展がないかもしれないけれど。

そしてそれは二年目以降の『私』も守らなくてはならないルール。確証を得るまで姫川愛華に近づいてはならないという、最大の禁忌（タブー）。

二年目の『私』やそれ以降の『私』に少しでも望みが繋がりますように。
消えてしまうかもしれない記憶を少しでも多く『私』に残せるよう、帰るために頑張ろうね。

▲

（重要な記憶の殆どは消えてしまっていたけれど。）
（この日記を残してくれたことで蘇った記憶があるのだと、『私』に伝えたいと強く願った――。）

二年目を巡る『私』へ（後書き）

一年目の『私』から二年目の『私』へ、の文章でした。
『私』は常に同一人物ですが一年目は特に記憶のリセットが強いという感じです。

日記（九月）

夏休みの一件を経て、一年目の私は一学期より詳しく日記を書いていた。
姫川さんとの接触を極力拒んだ状態での情報収集には時間を要するのか、数日分の行動がまとめて記載されている部分もあった。

▼ 九月の日記

九月〇日　（くもり）

二学期開始日の本日。さっそく姫川さんと生徒会はやってくれた。
講堂で行われる始業式の最後に生徒会からの連絡と称して『姫川愛華を生徒会補佐に任命する』と会長が宣言したのだ。
生徒会や風紀は『数持ち』と呼ばれる家柄がないと所属できないのに。彼等いわく、補佐だから『数』は必要ないのだとか。

ザワつく講堂を見回してみたところ、私は二つ疑問点に気付いた。
まず一つ目は、生徒会顧問のホスト教師が姫川さんの生徒会入りに、私達と同じように驚いていたことだ。
『俺に相談も無しに、勝手に決めるな』と風邪を引いているホスト教師がマスクでイケてる系の顔の半分を隠した状態で咳き込みながら突っ掛かっていたから、顧問を無視しての決定なのは間違いない。
次に二つ目だが、一学期には生徒会の行動に顔をしかめていた男子生徒達が『姫川さんなら』と納得の表情を浮かべていること。

いよいよ本格的に学園の歪んだ部分が見えてきた気がした。
とりあえずコソコソ頑張ってみるから、姫川さんとの接触だけは勘弁して下さい。

九月×日　（くもり／はれ）

朝からホスト教師にバッタリ会ったので挨拶したら超驚かれた。
なぜ。
今日も昨日に引き続きマスクをしているという事は風邪が完治していないようだ。感染したくないので近寄らないでほしい。
でも姫川さんの取り巻き化している人物に個人単位で接触できる機会は滅多にないので少し観察させてもらうことにした。
どうやら朝っぱらから何処かに書類を届けるようで、ホスト教師の手には二十枚近くの用紙があった。これが重い荷物なら運ぶ手伝いを申し出たのだけれど、紙切れじゃぁ仕方がない。

『こんなに早くからお仕事ですか？』と会話のキャッチボールを試みるとまたもや驚かれた。だからなぜ。
私の問い掛けにホスト教師はぎこちなく『生徒会の仕事だ』と答えた。ああ。だから朝早くから一生懸命仕事をしているのか、と冷めた気持ちになった。
それが後押ししてしまったようで『朝から姫川さんに会えるなんて良かったですね』なんて嫌味を込めて言ってみると『馬鹿言うな。姫川は綺麗なだけの女で何の魅力もないだろ』と真顔で返された。

あれ？　先生って姫川さんのこと名前で呼んでなかったっけ？
それに姫川さんのことを気に入って、尻を追いかけまわしてたんじゃ？

『じゃぁな』と短く別れを告げられて去っていくホスト教師の後ろ姿は、一学期のモノとは違っているように思えた。

九月△日　（くもり）

二学期が始まって数日経過した。すっかり忘れていた実力テストに多少焦ったが、一学期の期末と同じ方法で解答欄を埋めたので特に問題は起きないはず。

それよりも、ホスト教師だ。

テスト終了と共に風邪も完治したようなので、問題の質問を装ってもう少し姫川さんの情報を聞き出そうとしたら態度が百八十度変わっていた。

『愛華なら可愛くお願いをする』『お前も愛華を見習って少しは可愛くなれ』『ま、愛華ほどの女は世界中どこを探しても存在しないがな』とかグダグダと言いやがったので質問していた問題は『急に閃いたので結構です』と告げて数学準備室を後にした。爆発しろホスト教師。

先日は姫川さんのことを否定していたのに、今日のホスト教師は姫川さんのこと名前で呼んで惚気話も絶好調。早く姫川さんの居る生徒会室へ向かいたいと愚痴を零しつつソワソワしていた。

どうやらホスト教師が正気?に戻ったのは風邪を引いている間だけだったようだ。

うーん。これって結構重要な手掛かりじゃないかな。引き続き調査を続行しようと思う。

九月▽日　（はれ）

テスト結果発表と同時に学級委員長へのイジメが再開された。姫川さん本人をイジメない理由は生徒会や風紀の他に、姫川さんに好意を寄せる男子の目が常に光っている状態だからだ。

今はまだ下駄箱に生ゴミ投入と教科書がビリビリに破かれていること以外は起きていないようだけど、その内エスカレートしていくと思う。

今日の昼休み、生徒会室で例のメンバーを集めて昼食を取るという姫川さんに半ば強制的に学級委員長が連行されていたので拍車がかかる事は間違いない。ＫＹ炸裂の姫川さんが委員長にベッタリな限り。

そういえば最近、生徒会や風紀が仕事をしていないと噂が流れている。だから委員長のイジメも放置されているのか。

九月や十月は目立った行事が無いので今のところ大きな混乱は生じていないけれど、十一月には『創立祭』と呼ばれる世間一般では文化祭に該当する盛大な行事がある。

例年通りなら、そろそろ文化委員が集まって詳細を詰めているはずなのだが……。果たしてそこに生徒会や風紀の姿はあるのだろうか？

その辺りのことも調べてみようと思う。慎重に、ね。

九月□日　（くもり／あめ）

火の無いところに煙は立たない、という言葉は本当だった。
噂の通り、生徒会と風紀は姫川さんを囲って日々お茶会だ何だと遊び呆けて執務放棄をしていた。
『創立祭』の準備は各委員会の委員長または代理である女子生徒達が行っているらしい。男子？そんな性別ありましたっけ？

学園をまとめるのは生徒会と風紀の二大勢力だが、体育・文化・図書・美化・保健といった各委員会の委員長もそれなりの権限を所有している。特に今回の『創立祭』で生徒会と一緒に中心になる文化委員会の長である先輩は学園女子生徒の代表と言っても過言ではない人だ。

もし、その先輩が各委員会と姫川さんを除く学園中の女子生徒と結託して対抗したとすれば……？
――なんて、最悪のシナリオを考えた私は徐々に迫りつつある『創立祭』が少しだけ怖くなってしまった。

九月●日　（くもり）

やはりイジメの内容はエスカレートしている。
学級委員長がモップを洗った後の汚れた水を頭から浴びせられたようだ。
実際にその現場を見たわけではないので断言はできないが、とりあえず第三者の仕業なのだけは確実。

しかし、そんな委員長を見てイケメン達と教室でイチャついてい

た姫川さんは『ヤダ、詩織ったら転んだの？』とトンチンカンな発言をなさった。

委員長の席は姫川さんの隣なので、体操服やタオルと取るために必然的に近づかなくてはならなくなる。それが姫川さんが中心になっているイケメン達には考えつかなかったらしい。

『愛華が汚れる』と言って委員長を遠ざけようとする面々に、姫川さんは『親友の詩織に酷いことを言わないで』と美しい顔を悲しげに歪ませた。だがすぐに『みんな心配してくれてありがとう！』と言って満面の笑みをイケメン達に向けたのだ。

呆れを通り越して、悪寒がした。

本当に親友なら委員長がずぶ濡れで現れた瞬間に駆け寄るはずだ。周りの男共なんか蹴散らして、何があったのかと理由を聞くはずだ。

姫川さんにとって委員長は親友なんかじゃない。自分をより良く魅せるために『踏み台』だ。

だから姫川さんは、自分の荷物を掻き抱いて教室から逃げ去った委員長を追いかけもしなかったんだ。

『今日のお茶はダージリンがいいな』と副会長の腕に手を絡ませた姫川さんが、私の目には心を持った人間に映らなかった。

九月▲日～■日　（あめが降り続いた）

この三日間、学級委員長は学校に来ていない。

一応担任であるホスト教師によると風邪で寝込んでいるらしい。

自称親友の姫川さんは、イケメンと遊ぶのが楽しいようで委員長が休んでいることに気付いていなかった。

九月◎日　（はれ）

委員長が登校してきた。

が、何故か姫川さんは『休むなら連絡してくれなきゃ！』と怒っていた。周りのイケメン達も『愛華に心配かけたから謝れ』と意味の分からない事を言っている。

それに対して何か言いたげな委員長だったが、諦めたような表情で姫川さんに小さく謝っていた。

――もうあの連中はダメだと思う。

イケメン達に憧れの視線を送っていた女子の殆どが、冷めた眼で自分達を見ていることに全く気付きもしないのだから。

あ。そういえば、九月に入ってから生徒会と風紀は一度も仕事をしなかったようだよ。

▲　九月の日記はここで終了している。

（一年目の『私』は創立祭が怖いと綴っているけれど）

（私はこれ以降の日記を捲るより、これから先の二年目（みらい）の方が怖くなってきたよ――。）

日記（十月）

先の日記にもあったように、九月と十月は創立祭に向けての準備等で特に目立った行事はない。

しかし今の私にはそれが嵐の前の静けさのように感じられて、ざわざわと沸き上がってくる嫌な予感を必死で否定し続けた――。

▼　十月の日記

十月〇日　（はれ）

創立祭が近いのでクラスで何をするか話し合うことになった。

姫川さんは生徒会の方で忙しいという理由から不参加らしく、同じく生徒会に関わりのあるホスト教師の隣に座ってファッション雑誌を一緒にみながらイチャイチャしていた。ウゼェ。

男子は嫉妬心丸出しの目で二人を見ていたが、もはや彼らに無関心になりつつある女子は総じて無視。ある意味ＫＹの二人のおかげで催し物が『休憩所』に即決した。やる気が無さすぎるぜ二年二組の女子達。

職務放棄真っ最中の生徒会と風紀だが、彼等は合同で劇をするようだった。

仕事はしないくせに創立祭への申請だけは行っていることに、溜息しか出てこない。

私の予想ではそろそろ各委員会の委員長が動き始めるんじゃないかと思っている。諜報活動もより慎重に行う必要がありそうだ。

十月×日　（はれ／くもり）

ついに学級委員長の堪忍袋の緒が切れた。

という表現は大袈裟すぎるので、委員長が姫川さんに反抗したと記しておこう。

しかし場所とタイミングが悪かった。

食堂二階にある生徒会専用席に連行される途中での抵抗は、委員長が自分の首を締める結果に終わってしまった。

二階へあがる階段の前でのそれは姫川さんを輝かせるだけの舞台にしかならない。

たった二、三段だ。たったそれだけの高さでも姫川さんが『階段から落ちた』という事実を作り出すにいは十分すぎる材料だった。

委員長が勢いよく姫川さんの手を振り払ったところで、姫川さんが悲鳴をあげながら階段から大袈裟に倒れた。

そう、倒れただけだ。どこからどう見ても『落ちた』のではない。だけど姫川さんの事が大好きな人達の目にはそう映らなかった。

姫川さんを助け起こす面々の視線は委員長に集まり、まるでゴミを見ているかのような印象を抱かせた。

罵倒する男子生徒や呆れる女子生徒の気持ちが混在する中、結局は暴行の現行犯ということで風紀に謹慎処罰を受けた委員長。

しかし彼等いわく天使のように優しい心を持つ姫川さんの申し出で、三日以内に反省文を提出するという罰に軽減された。

委員長のことはとても気の毒だと思う。

でも、私はそれを庇えない上に明日の我が身だと思って警戒心を強めるに留まる他がない。
ごめん、委員長。ループを抜け出した先の委員長も笑っていられるのだと信じて、頑張ってみるから――今はまだ、我慢して下さい。

十月△日　（くもり／あめ）

毎度のことだけど今回もすっかりテストの事を忘れていた。
復習でもするか、と図書室へ向かおうと思ったが毎回姫川さん達が騒いでいることを思い出したので今日は教室で勉強することにした。
しかし教室の扉を三センチ開けたところで教室に姫川さん達の姿があるのに気付き、私は慌てて回れ右をした。騒がしかったので扉が開いたことには誰も気付いていないはずだ。
というか、教室が騒がしい時点で私が気付けば良かったのだけれど。

何だか微妙に疲れてしまったが、再び遭遇しないことを切に願いながら私は素直に図書室に行った。
姫川さん達を警戒してか、本来ならばテスト前で勉強している生徒の姿があっても可笑しくないはずなのに、図書室に居る生徒は少なかった。
室内の奥に目をやると珍しく会計の姿が確認できた。しかし私が勉強道具を広げたころには居なくなっていた。姫川さん達のところへ向かったのだろうか？

十月▽日　（はれ）

テストの結果が発表された。いつも通り姫川さんは学年三位で私は七十位台。

しかし、今回のテスト結果に生徒達の動揺が大きかった。

今まで日記には記載していなかったが、生徒会や風紀のメンバーも当然のように学年上位三十名の中に名を連ねていた。

それがどうしたことだろうか。一年から三年の結果表に誰一人として名前が載っていないのだ。

三年からは主席、次席、三位と独占状態だった生徒会長と副会長、風紀委員長の名が。二年からは十位以内に名前があったはずの会計と風紀副委員長。一年からも生徒会の双子と風紀の不良くんが。

『あんな女に夢中になっていたら当然よ』と誰かが小さく呟いた声に、私は心の中で同意した。

十月□日　（くもり）

生徒会や風紀のファンだった女子生徒達からの学級委員長への嫌がらせが無くなった。

最初は、姫川さんと一緒にいることで生徒会や風紀との接触を持てる委員長への嫉妬から始まったイジメだが、二学期が始まってからは姫川さんへ向けられない怒りが八つ当たり的に委員長へ向かっ

ていた。
しかし先日のテスト結果を機に、女子生徒の怒りはイケメン達への失望と諦めに変わってしまったのだろう。
委員長へのイジメがなくなって一安心だけど、皆の失望が最終的に何を招くのか。先の見えない不安によって目の前が真っ暗になりそうだった。

十月◇日　（あめ）

創立祭でのクラスの出しモノ『休憩所』のことをＬＨＲで話し合った。
中心になるのは文化委員のハキハキした女子で、姫川さんとホスト教師、姫川さんに熱視線を送っている男子を無視して机や椅子の設置場所を黒板に書いていく。
途中で姫川さんが周りの男子に『劇を見に来てね！』と言っていたが、女子達は姫川さんの声をシャットアウトしているようだった。
一学期にはときどき片恋相手を見て頬を染めていた絵理だけど、すでにその恋は終わりを迎えたようで他の女子と同く無関心を通していた。
二学期末には結ばれるはずだった親友の恋の終わりを目にして、胸が痛くなった。
今この瞬間にも、私の知らない一年（みらい）が作りだされているのだと再認識せざるを得ない。

十月●日　（はれ）

十月はイベントが何もないと思っていたが、姫川さんの中では違っていたらしい。

『今月最後の日にハロウィン関連のイベントを行うので全校生徒は必ず菓子を持参するように』と授業中にも関わらず生徒会が緊急放送を流しやがった。

詳細は当日発表らしいので、仕方なく近所のスーパーで飴の袋を一つ買って帰った。

ああ、飴代の百五十八円を請求したい。

十月▲日　（くもり）

朝っぱらから否応無しに講堂に集められた。

程なくして姿を現した姫川さんと残念なイケメン達。とりあえず奴らの格好にツッコミを入れさせてくれ。

昨日の校内放送でハロウィンという単語を聞いた時点で何となく予測はできていたが、いざ目にしてみると痛さ百倍だった。

まず生徒会と風紀、そして各顧問。各自が思い思いの『王子様』のような格好をしていて、見ているコッチが恥ずかしくなった。もうアイツ等はダメだ。

そして今回もマイク片手に自分が発案者だとご機嫌で語りだす姫川さんの格好は、童話のお姫様達もビックリするほど煌びやかなドレスをまとった『お姫様』だった。

周りのイケメン達が金持ちなだけに、そのドレスと装飾品の総額は庶民には目にすることも叶わないだろう。

美しいドレスに美しい宝石。そしてそれを身にまとう姫川さんも美しい人なのに、私には何故か姫川さんが輝かしく見えなかった。むしろドレスと宝石が濁ってさえ見えた。

蔑んだ女子の視線をお得意のＫＹで受け流している姫川さんによると、今日は『好きな人に思う存分お菓子をねだっちゃおう！』の日らしい。こじ付けも良いトコロだ。ハロウィンに謝れ。

しかし、馬鹿馬鹿しいとばかりに深く長い溜息を吐く女子とは逆に、姫川さんの信者と化した男子達はヒートアップした様子。

『愛華ちゃんかわいいー！』『俺の愛を受け取ってくれー！』『愛華ちゃんの愛をくれー！』とかキモイことを叫びながら席を立ってステージ下に集まる男子達に、『もう、慌てないで？私の愛はぁ、みーんなのモノだよ！』とウインクしながら手を振っている姫川さん。

とりあえず前方に集まった男子の集団に向かって、持ってきた飴玉を全力で投げたのは当然の行動だと思う。私の他にも同じようなことをしている女子がたくさんいたし。

ハロウィンの仮装（と書いてコスプレと読む）でこのテンションなのだから、創立祭の劇はどれだけ恐ろしい事になるのかと、今から頭が痛くなってきた。

そんな中、『ホント、地に落ちたものね』と冷たい声色で吐き捨

てたのは同じクラスの文化委員の子。
別のクラスで同じく文化委員に所属しているであろう生徒と一緒に姫川さん達を見る目は、何か底知れない光を宿していた。

創立祭をキッカケに、学園が大きく動き出すかもしれない――。
周りの女子生徒に一声かけるだけで多くの女子生徒を引き連れて講堂を去っていく文化委員達の後ろ姿を見て、私は自分の無力さが情けなくなって泣き出したくなった……。

▲　十月の日記はここで終了している。

（楽しく暮らすだけのお姫様に、一体なにが起こるのだろうか）

（不穏な空気に気付かないはずがないのに、お姫様は何故逃げ出そうとはしないのかな……？）

日記（十月）（後書き）

文化委員は女性だけの集団です。

お姫様のワタシ（前書き）

※逆ハー女の独白

お姫様のワタシ

ねぇ、神様って信じてる？
私？　私は信じてあげても良いって思っているわ。
だって私にこんな素敵な世界をくれた彼女が自分を女神様だって言っているから。

この世界ってば本当に最高なの。
お姫様の私が何か望めば王子様達はなぁんでも叶えてくれるし、愛してくれる。
女神様の魔法のおかげで最初から私のことが大好きだから、私も誰を選ぼうか悩んじゃうのよね。
でも一年の中盤あたりには、その人の個別ルートのシナリオを進めなきゃならないの。
だから今までは順番に各王子様の好感度を高くしてルートに入れるよう調整してたわ。

だけどね、これ以降は違うの。
だって生徒会も風紀も、みーんな私が攻略しちゃったんだもの。
お気に入りのルートは何度か攻略したけれど、結果を知っているから飽きちゃった。

だから、新しい攻略キャラが現れるまで好き勝手やろうって決めたの。
最終的な目標は全キャラ攻略後の逆ハーレムエンドだけどね！
うふふ、楽しみだわぁ。
女神様も色んなエンディングを迎えることで新しい道が開けるって教えてくれたし、まだまだ楽しめる部分は多いはずよ。
でもなかなか条件が揃わないのよね。普通のゲームなら全員攻略

済で新キャラが登場するのがセオリーなのに。

――あら、電話だわ。
もしもし？　あ、女神様！
え？　新しいキャラを出すための情報を教えてくれるの！？
――……えぇ、……ふぅん、……ふふっ、そんな仕組みになってたのね。わかったわ。

じゃぁ、次の周に新キャラを出す為の準備として――。

この周では、生徒会と風紀を壊してしまうわネ。
逆ハーレムエンドのために、お姫様の私に利用されることも王子様達にとっては幸せの一つデショ？

お姫様のワタシ（後書き）

壊す事が前提だから批判なんて怖くない、という狂った思考。
何故ならそれは新しい楽しみを生み出すための一歩でしかないのだから。

日記（十一月）

文化委員会と言えば、生徒会や風紀を除く委員会組織の中で最も権力のある委員会だ。
その中でもトップに立つ先輩の名前は確か――。

▼ 十一月の日記

十一月〇日　（くもり）

数日後に創立祭を控え、学園内もそわそわと落ち着きがない。
私のクラスだけでなく何処のクラスも出店準備に追われているのは女子生徒だけで、何も手伝わない男子生徒達は口を開けば姫川さんの話題だ。

まるで魅了の魔法にでもかかったような様子は正常とはほど遠く、学園外でもこの様子なのだろうかと少し気になった。
が、特に親しい男子の知り合いがいない私には確認の取りようがなかった。
夏休み前に聞いた絵理の片恋相手は、大差ないようだったけれど。
本当のところはどうなのだろう？

十月×日　（くもり）

最近天気の悪い日が続く。

創立祭が開催される明日も午後から雨だと天気予報のお姉さんが言っていた。
私の記憶が正しければ、ループに気付く前の創立祭は全て晴れていたはずだ。
しかし今回の創立祭は違う。これは私がループに気付いた一年に何か今までとは大きく違った事が起きているという知らせなのだろうか。

創立祭が雨だと聞いて微妙な顔をしていた姫川さんにも少し気になった。
周りのイケメン達は姫川さんが残念がっていると解釈したようだが、私にはそうは見えなかった。

十月△日　（くもり／あめ）

ついに創立祭の日がやってきた。
校内放送で文化委員長の綺麗な声で開会が告げられ、学園内のあちらこちらで楽しそうな声が聞こえてくる。
どうやら生徒会や風紀が表立って参加しなくても、文化委員会を中心とした各委員会の入念な打ち合わせにより問題なく進めることができそうだ。
進行などは文化委員会が担当し、外部客の対応や警備は体育委員会が中心となって信頼できる業者と共に請け負っているらしい。

私はと言えば、休憩所の係（と言っても座っているだけ）が済んだ後に絵理と学園内をブラブラしているだけだった。
時々、外部からの来訪者に道を聞かれる事もあったが他には特に

気にする点もなく時間は平和に過ぎていった。

問題は、午後からだった。

『生徒会劇が始まるので、是非お越し下さいねっ！』という語尾にハートマークが付きそうなテンションと声で姫川さんが校内放送を流すと、男子生徒と一般客の男性達が一斉に講堂へ移動し始めたのだ。

的中率百パーセントの嫌な予感を感じながら、隣でたこやきを頬張る絵理を誘ってみると即答で断られた。

私本人も行きたくないのだけど、二年目以降への情報として避けては通れない道。

偶然合流したクラスメイトに絵理のことを頼んで、私は一人で渋々講堂へ向かった。ボッチとか言わないで欲しい。

劇の演目は定番の『ロミオとジュリエット』。いや正確には『ロミオとジュリエットとマキューシオとティボルト』だった。ちょ、おま、何で二人も増えてんだ。

ロミオとジュリエットはわかる。でもマキューシオはロミオの友達でチョイ役だよね。ティボルトは確かジュリエットの従兄弟で色々あってマキューシオを殺しちゃう人だよね。まぁ、そのティボルトも逆上したロミオに殺されちゃうんだけど。

わあああ、開演前から展開が読めた。案の定、開演後も期待を裏切らずに話が進んだし。

オリジナルの悲劇感とか完全無視で、ジュリエットに一目惚れした男達が告白大会を繰り返し時には決闘、時には他者の妨害をするために結託、そして最終的には全員の愛を受け入れたジュリエットが対立していた両家を涙ながらに説得してハッピーエンドで終わる、という意味不明な内容だった。

配役を決める時に相当ゴネたのか、ロミオBマキューシオBとかティボルトBとか、本来は一人のはずの人物が二人存在していたりした。何じゃこりゃあああ！と叫ばなかった私を誰かに褒めて欲しい。

更に信じられない事に、終演後には講堂内の男性陣が感動の涙を流しつつ姫川さんの名前を呼びながらスタンディングオベーション。学園関係者も、一般の人も。

外部から創立祭に足を運んできたであろうカップルも、志望校見学のために創立祭を見に来た中学生達も、『男』に分類される者は皆姫川さんへ心の籠った拍手を送っていた。その傍らでは男性陣を信じられない者を見るような目で見ていた多くの女性達。

講堂の一番後ろではビデオカメラを片手にしている『文化委員』の腕章をした女子生徒が数名。

外は何時の間にか強い雨が降っていた。

講堂の屋根を伝って響いてくる雨音を耳にしながら、いつか見た光景に私は自分の背筋を冷たい何かが落ちていくのを感じた。

――後に聞いた話だけれども、今年の四季ヶ丘学園創立祭は過去に例を見ないほど男女の感想が分かれた回だったらしい。

来年に受験を控えている女子中学生の志望校が著しく変化する事だけは確かだと思った。

十月□日　（くもり）

当たり前かもしれないが、創立祭の評判は最悪だったようだ。

女性というものは噂話や世間話が好きなので、不評と判断した創立祭の話が世間に出回るのにはあまり時間が掛からなかった。

それをキッカケに、現在の学園状況を調査するよう学園経営陣（主に女性役員）から要望が上がったらしい。しかし学園の理事長を筆頭に男性陣が要望を却下し、学園関係者の上層部でも色々な問題が生じている。と風の噂で耳にした。

ある女子生徒が『学園は姫川愛華を贔屓している』と答えれば、ある男子生徒は『人気のある姫川愛華に女子が嫉妬しているだけだ』と答えるため、状況を把握しようにも回答が真逆で全く真実を見極めることができない。

私自身も、どうすれいいのか、わからない……。

十月◇日　（くもり）

絵理の片恋相手が姫川さんに告白をした現場を目撃してしまった。珍しく一人で居た姫川さんを見て衝動的に動いたようだけど、やはり周りのガードは甘くなかった。

彼は風紀に現場を抑えられて、何故か謹慎処分になった。
この学園はもはや姫川さんを中心に回る恐怖政治だ。

十月◎日　（久々のはれ）

今日は革命の日かもしれない……！

学園中の女子生徒が待ち望んでいた瞬間が昼休みに一人の先輩によって起こされたからだ。

食堂の一般席を占領してキャッキャウフフと桃色の空気を出しながら騒ぐ姫川さん達に、背中までの栗色のストレートの髪にコバルトブルーの瞳を持つ綺麗な女性――文化委員長が声を掛ける。

スラリと伸びた肢体に気品のある雰囲気を顔立ちをした彼女を見て、私は姫川さんより綺麗な人だと思った。

姫川さん達の目が揃って向けられた瞬間、文化委員長の先輩は手にしていた書類の束を食堂のテーブルの上に無造作に投げ広げる。

バサッ、と音を立てた書類は姫川さんを含む生徒会と風紀の面々の前に綺麗に広がった。

目を見開いた後、眉根を寄せたのは姫川さんを除く面々。中心に座っている姫川さんは周りのイケメン達の反応に小首を傾げて『この人はだぁれ？』と尋ねた。

いつもならデレデレに顔を崩して答えるイケメン達だが、代表として副会長が『三年の四宮樹里（しのみやじゅり）だよ』と答えるまで誰も口を開かなかった。

ガタン、と。静まりかえっていた食堂に姫川さんが椅子から立ち上がった音が響いた。

真正面から向かい合う形になっている文化委員長、四宮樹里先輩を信じられない者を見たような目で見つめる姫川さんの様子は誰が見ても異常だった。

『四宮……！？　な、なんで、だって四宮は隠し……――ゴホン

ッ！』と自らの言葉をワザとらしく中断させた姫川さんに四宮先輩は目を細め、その後すぐに『仕事もせずに遊び呆けて、貴方達は自分の役職を忘れているの？』と言いながら苦い表情のイケメン達に視線を移した。

そんな四宮先輩の無関心な反応に気を悪くしたのか、姫川さんは『酷いです、四宮先輩！みんなはちゃんと仕事をしているって言っていますっ。』と先輩の眼を再び自分に向けさせた。どんだけ自分に注目して欲しいんだ。

しかし、自分中心の我儘お姫様を四宮先輩は冷め切った目で言い放った。

『その頭の中身は空っぽなのかしら。都合の良いモノしか映さない瞳や媚びるだけの言葉が出てくる口は飾り物のようだから教えてあげる。生徒会と風紀がね、この数ヶ月間まともに仕事したことなんて一つもないわ。貴女も気付いているくせに見て見ぬフリをするのは止めなさい。チヤホヤされる事に慣れすぎた貴女を見ていると同じ女なのが恥ずかしくなるわ』と。

反論を許さない鋭い切り込みに姫川さんの顔は真っ赤に染まる。口籠る姫川さんを庇おうとイケメン達も席を立つけれど、四宮先輩の言葉は止まらない。

『学園生徒の上に立つべき者が朝から一人の女子生徒にベッタリ。十分程度の休み時間にもわざわざ足を運び、時には生徒会や風紀の特権だと言って授業を受けずに生徒会室や風紀室で楽しくおしゃべり。昼休みもほぼ全員で開始時から終了時まで食堂で騒ぐだけ。放課後になればなれで下校時間まで毎日お茶会を開いているだけでしょう。一体、これのどこに仕事をする時間があるというのかしら？それに貴女、数学と歴史公民以外の授業をほぼ欠席しているわね。生徒会の執務補佐という申請が出ていたけれど、本来あるべき補佐証明が存在しないため無効とさせてもらったわ。今までは成績が上

位だから軽視されていた部分もあるけれど、今後は学園の指定した医師の診断書がない限り一間でも授業を落とせば留年することになるわよ』という言葉に、今度は姫川さんの顔色が『証明って何！？そんなの、知らない……！』と言いながら一気に悪くなっていく。

慌て始めた姫川さんを落ち着けるために、会長や風紀委員長が口を開こうとするが、次の言葉で反論を許されなかった。

『まさか生徒会の役員たる者が補佐証明の事を忘れていた、なんて言わないわよね？生徒会と風紀で手続きや法則が変わったなんて言わせないわよ。生徒会も風紀も経験したことのある私に子供騙しは通用しないから。それに、彼女が来てから停滞していた仕事を済ませたのは私なのだから。――呆れた。本当に気付いていなかったの？』と。視線の先にはテーブルの上に広がった数十枚の書類。

ぐっと押し黙ったイケメン達には最初から反論など赦されていなかった。

いつもの明るい表情とは違って、悔しさや怒りに唇を噛み締める姫川さんの眼は四宮先輩をきつく睨みつけていた。

それでも四宮先輩の意志の強い目は全く揺らがず容赦無い言葉を生み出していく。

『全員、肝に銘じておくことね。文化委員会委員長兼、”生徒会監査”の四宮樹里が動き出したことを。そこのお姫様に監査の私が持つ権力のことをよく教えておきなさい』と、最後に締め括られた四宮先輩の言葉は、姫川さんとイケメン達への死刑勧告に聞こえたのは私だけだろうか。

四宮先輩が姿を消した食堂で声を上げて怒りを露わにした姫川さんに、イケメン達も困惑気味で優しく声をかけていた。

腐敗していく学園にとって、四宮先輩は唯一の光に見えた。

▲　十一月の日記はここで終了している。

そうだ、名前は『四宮樹里』先輩。

一年で生徒会、二年で風紀、そして三年で生徒会入りを断って文化委員の委員長になった女子生徒で唯一の『数持ち』。

『生徒会監査』の役職まで担っていたとは知らなかったけれど、私を筆頭に四宮先輩が女子生徒の希望になったことだけは間違いない――。

（でもそんな強かな先輩が心配でもあるのです、と直接言えないことが酷くもどかしい）

日記（十一月）（後書き）

今回は逆ハー女が痛い目をみる月でした。

日記（十二月）

四宮樹里先輩の登場で、この学園はどの方向に進むようになるのだろう。

姫川さんに敵意を向けられた先輩が介入する十二月の日記を、私は逸る気持ちで読み始めた。

▼　十二月の日記

十二月〇日　（くもり）

四宮先輩の一言が効いたのか、生徒会と風紀はあれから少しずつ仕事を再開するようになった。

といってもブランクのある彼等を生徒会監査の四宮先輩と文化委員副委員長二人の計三人でサポートをしながら、だけれども。

また十二月から年明けはどの業界も多忙ということもあって、家業の手伝いをするイケメン達は更にお姫様の姫川さんと共有する時間が少なくなっていった。

そうなると姫川さんに構い切りという事がなくなってくる。必然的に姫川さんの環境は変化し、今までお姫様扱いを受けていた姫川さんは目に見えて機嫌が悪くなっていった。

ご機嫌ナナメなお姫様に困惑する王子様達だが、何やらお姫様のお供を当番制にする形で許してもらう事にしたらしい。何様だ姫川さん。あ、お姫様か。

そんな感じで最近は、姫川さんの周りは生徒会と風紀からの当番

と姫川さんに夢中な一般男子生徒達、という取り巻きに変わった。
この変化があって再認識したのだけれど姫川さんはやはり美形が好きみたいだ。何故なら、取り巻きの一般男子はある程度の容姿がないと輪に加われないからである。
わりと美形の男子生徒の話なら耳を傾けるが、好みじゃない男子生徒の話は早々に切り上げられて別の男子に話題が振られていたりする。
不思議なのは、姫川さんに告白して撃沈した絵理の片恋相手だった彼が取り巻きに含まれていることだ。普通なら多少は冷めそうな気持ちが全く変化ないように感じた。
まぁ、諦めの悪い男も世の中にいるから、その一人なのだと思えなくもないけれど。

ちなみに生徒会補佐に就任していた姫川さんだが、できる仕事が少ない（ぶっちゃけ無い）ので忙しい時の臨時補佐に変更されていた。
今がその忙しい時じゃないのか、と思ったのは私だけではないはずだ。

十二月×日　（はれ／くもり）

今日から気温が一気に下がり始めた。天気予報のお姉さんによると暫く寒い日が続くらしい。
確かにマジ寒い。こりゃ暖かくしてないと風邪ひくわー。お姉さんも『風邪などには十分お気を付けください』と言っていたし、気を付けようっと。

そんな本日、一人で廊下を歩いている姫川さんを偶然発見した。
絵理の片恋相手が告白した時も一人だったから、もしかすると姫川さんは定期的に一人になるタイミングがあるのかも？
これは姫川さんを観察するチャンスだ、とばかりに尾行したが東校舎と西校舎への分かれ道付近で見失ってしまった。なんてこったい。

十二月△日　（くもり）

ホスト教師は風邪をひきやすい体質なのかもしれない。
マスクをしている状態でズビズビゴホゴホしながら朝のＨＲで出席を取っていた。何かいろいろ台無し。
教室内を見回せば風邪により休んでいる生徒も数名。姫川さんの後と右隣、委員長の前後。
あれ？　何か姫川さんを中心にして空席目立ってね？　これって偶然、なのかな。

十二月▽日　（くもり）

今日も寒い。
セレブ校なので冷暖房完備だが、さすがに渡り廊下などの外に面する場所まで暖かいはずがない。
その渡り廊下を歩いている際、西校舎二階の廊下を一人で歩く姫

川さんを発見した。
慌てて西校舎に移動するも姫川さんを再発見するには至らず。私、探偵とか絶対向いてないわ。高校生探偵とかちょっと憧れてたけど。

再び渡り廊下に戻ると風紀副委員長を見かけた。
マスク装備済で顔が半分しか見えないが、あの美しいハニーブロンドの長髪男子は風紀副委員長以外にありえない。どこかのホスト教師みたいに体調不良ではないようなので、風邪対策のためのマスクなのだろう。
どうやら四宮樹里先輩の一件以来、生徒会と風紀が仕事を再開したという噂は本当のようだ。今は見回りの真っ最中らしい。
直接声をかける勇気はないが、心の中で言っていこう。ご苦労さまでーす。

十二月□日　（はれ）

もうテストとか無くなれば良いのに。またまた前日に思い出す私も私だけど。

今回のテストでは前回で大きく順位を落としたイケメン達も本気を出すらしい、と絵理が噂を教えてくれた。
何だか最近は女子の間で下落しまくっていたイケメン達の株が少しずつ上昇している。女子の見解は、姫川さんとの接触も前に比べると少なくなったので以前のようにカリスマ性溢れる姿に戻りつつある、だ。
しかし、そんなに簡単に女子が冷め切った心を取り戻すわけもないので現在は様子見に逆戻りといったところだろうか。

まぁとにかく、学園が四宮先輩の手によって良い方向へ戻りつつあるのは確かだ。ありがとうございます四宮先輩！

ついでに記載しておくと、図書室で会計の姿を発見した。何かの本を持っていたのでコッソリ背表紙を見てみると英語じゃない外国の文字だった。私に読めるはずがない。残念。

十二月■日　（はれ）

テストの結果発表だった。

何を考えているのか、二年の学年トップは姫川さんだった。なぜこの時期にトップに立つのか彼女の思惑がわからない。

ちなみに、三年のテスト結果は全教科満点で会長と副会長と風紀委員長、そして四宮樹里先輩がトップだった。四人も満点とかどんだけー。

他の生徒会役員や風紀委員も元の順位に名前が載っていて、ガタ落ちした成績を戻すことは叶ったらしい。

そういえば、四宮先輩の名前がこうして載るのを目にするのは初めてかもしれない。どうして今まで載っていなかったのかな。

もしかして、私と同じように手を抜いていたのかも？

そう考えると、ちょっぴり親近感が沸いて嬉しくなった。どうやら私の中で四宮先輩は憧れの先輩になりつつある。

十二月◇日　（くもり／はれ）

油断していた。

生徒会と風紀が仕事をするようになったから勝手に安心していた。

イケメン達が姫川さんと一緒にいる時間が減ったからといって、姫川さんへの好意の視線が減ったわけではないこと理解していなかった。

いつも通りの観察方法や尾行方法で姫川さんを追っていたら、たまたま見回りをしていた風紀委員長に背後から声をかけられた。心臓が破裂するかと思った。

風紀委員長との間にはかなり距離があったので、私はすかさずその場から逃げだしてしまった。今考えると怪しさを増す行動だ。

風邪対策をしていた風紀副委員長を見習ってマスクをしていたから顔はバレていないと思うけど、やっちまった。

今後、姫川さんの事が調べ難くなる上に下手をすると接触する可能性が大だ。あああ、私の馬鹿、最悪！！

十二月◎日　（あめ／ゆき）

接触してしまった。

誰にって？　実はそれは――……。

連日の寒さより更に気温が下がった今日、懲りずに私は姫川さんを尾行していた。

先日あれだけ後悔していたくせに尾行を止めていなかったのには理由がある。姫川さんが西校舎の二階を一人であるいている、という絶好の状況に遭遇してしまったからだ。

私の今までの調べによると姫川さんは学級委員長以外と西校舎の二階で誰かと行動を共にしたことはない。つまり男子と西校舎二階にいたことがないのだ。

一階や三階では多くの男子生徒とキャピキャピしているくせに、イケメン達や他の取り巻きを引き連れて二階に足を踏み入れていない。

これは、何か秘密があるに違いない。

そう判断した私は周りに気を配りながら今までになく慎重に姫川さんを尾行した。

コ字型に作られた西校舎は直線の廊下が長いので、姫川さんが次の角を曲がらない限り追跡できないという不利な状況だったが、素人探偵の私は頑張った。超頑張った。

はずだが、姫川さんが曲がったはずの角から程なくして風紀副委員長が現れ全てが水の泡になった。更に最悪なことに、直線の廊下をUターンダッシュしようとした私の前方から風紀委員長が現れた。

どちらも私の存在に気付いた様子はなかったが、絶対絶命の大ピンチだった。

何も知らない顔をして通り過ぎるだけで疑われるはずなんてない、という考え。人気のない西校舎を一人で徘徊していたことをどちらか一方に質問され疑われる、という考えの二つが私の中でぐるぐると廻った。

もっと最悪の場合は姫川さんが再び現れて私と完全に接触することだ。それだけは何としても避けなくてはならない。ぶっちゃけ全部避けたい。でも無理だ。

あわわわわー！　と近づく風紀の二人に混乱していた、その時だった。

どこからどう見ても壁にしか見えない廊下の一部がスライド式の扉のように横に開き、中から伸びてきた手が私の腕を掴んで中に引きずり込んだのは。

音もなく壁が元通りになると、私の腕を掴んでいた人物は小さな息を吐いた。その人物は――今や女子生徒の憧れの的である、四宮樹里先輩だった。

驚きすぎて言葉も出ない私に、四宮先輩は『乱暴にしてごめんなさいね』と言って優しく笑った。

そこで気付いたのだが、私がたった今入り込んだ壁の中は普段授業を受けている教室と全く同じ作りをしていて、私が入って来た『出入口側』の壁がマジックミラーになっている凄い部屋だった。

外からは全く存在を察知することができない、不思議な教室。そんな秘密基地のような場所に私と四宮先輩の二人だけが息衝いていた。

『あの、ここは？』という記憶喪失者が言いそうなセリフを口にした私に、先輩は少し困ったように笑って『姫川愛華対策捜査本部かしら』と言った。

意外な言葉にポカーンと口を開けて呆ける私に先輩はもう一度優しく笑ってくれた後、更に私を驚愕させる強烈な言葉を続けてくれた。

『貴女も、”姫川愛華を中心とした一年”が繰り返されている事に気付いたのでしょう？』と。

なんと四宮先輩は、私と同じく『ループに気付いた者』だと口にしたのだ。

私以外にループに気付いている人がることが嬉しくて仕方無かった。だけど今は驚きの感情の方が勝っている。

そのせいであまり回転していない頭で必死に言葉を選んで色々話を聞いてみると、更に更に驚くことに四宮先輩がループに気付いたのは数年前からだ、と告げられた。

『最初は彼女が転校してきて誰かと恋をして結ばれるだけだったのよ。でもね、一年を繰り返す数だけ彼女の相手が違っていることに気付いたの』と言葉を紡ぐ先輩の表情は明るくない。

『繰り返される事は私にとって苦痛ではなかったわ。三年生にもなると大切な学園や友人と離れることが酷く悲しく思えてしまうものだから。――だけど、今回は大きく違った』と。見えない何かに対して怒りに近い感情を向ける先輩の瞳には力強かった。

『彼女、姫川愛華がここまで学園を滅茶苦茶にしたのは今回が初めてだわ。今までは最終的に特定の異性と恋愛関係になったはずなのに、今回は一度に全員を得てわざと学園を混乱させている。さっきも言ったけど私は学園に対して少し思い入れが強いの。生徒会や風紀の仕事を経験して多くの生徒に触れ合い、ここが私の人生で一番充実した場所だと思えた。だから今回のことが我慢できなくて表舞台に出てきてしまった、というわけね』と語りながら、マジックミラーの先で幾つか言葉を交わして去っていく風紀委員の二人を見る四宮先輩の目は少しだけ悲しそうに揺れていた。

『数持ち』の由緒正しい家柄の四宮先輩にとって、学園は楽しく過ごせた大切な場所なのだろう。その場所で交流を深めて来た生徒会や風紀委員、そして全ての生徒が先輩にとっては宝物。

私も自分の日常を取り戻したいけど、四宮先輩の大切な学園が元に戻る方が先だな、と強く心に思った。

十二月▲日　（はれ）

先日、四宮先輩に隠し教室の開け方を教えてもらった。
聞いた話によるとこの隠し教室は代々諸先輩方から後輩へ受け継がれてきた『秘密』だそうだ。
今現在で部屋の存在を知っている在校生は四宮先輩のみで、先輩は次に継ぐべき後輩を選んでいる最中だったとか。……何か私が割り込んだ形になってしまったけれど。

まぁ、そこは不可抗力ということで片付けさせてもらうとして。
というわけで、さっそく隠し教室で四宮先輩を待伏せし、協力を申し出ると即答で断られた。ガーン。

先輩いわく『連なっての行動は危険だから』らしい。
たしかに、急に私が先輩の金魚のフンになれば必然的に周りの目に留まることになる。
ループに気付いていることを悟らせてはならない、と先輩は頑なに私に注意してくれた。
『私は既に彼女の敵だと認識されてしまっているわ。だから今回のループで彼女から学園と友人を奪い返して、彼女の思い通りにいかないことを教えてあげるつもりよ。ループの件は幾つか気になる事を押さえてあるから、私の方でもう少し考えがまとまったら教えてあげる』と言った先輩の言葉に、渋々納得して今日は解散となった。

私も先輩の力になりたいのに、何をすれば力になれるか分からない。
もっともっと色々考えて、せめて先輩の邪魔にならない行動を取るよう注意しようと思った。

十二月♭日　（はれ）

先輩は今日も文化副委員長二人と一緒に、生徒会と風紀の仕事を手伝っている。
冬休み前までに一月の案件を幾つか片付けておくそうだ。デキル女って素敵！

十二月♯日　（はれ）

今日は終業式だ。
隠し教室で先輩を待ってみたけど、会えなかった。残念。

十二月▼日　（くもり）

冬休みになった。

セレブはクリスマスパーティや仕事で忙しいらしく、先輩とも連絡が取れない日が続いた。
姫川さんやイケメン達のことはよく分からない。冬休み前に先輩に聞いた話によると『過去』は恋人になった人物の家のパーティに出席していたそうだ。
先輩はイケメン達と面識のある『数持ち』の出身だから、目撃したことがあるのだろう。
そう考えると、何年もの間、姫川さんと接触しないよう行動してきた先輩は凄い人なのだと改めて思った。

あーあ、早く学校が始まらないかなぁ。
こんなに新学期が待ち遠しい冬休みは初めてかもしれない。

十二月◆日　（ゆき）

今日で今年も終わりだ。
色々あったけど、来年でループが終わってくれればいいな。

先輩と絵理と友人達に年末年始の挨拶メールを送って、今日は寝よう。
あ。紅と白の歌合戦を見るの忘れてた。明日絵理に聞こうっと。
オヤスミー。

▲　十二月の日記はここで終了している。

（表舞台に立ってしまった四宮先輩が、彼女に勝てますように……！）

（未だ舞台袖に隠れたままの私は、存在するはずのない神様に強く祈ることしかできなかった）

日記（十二月）（後書き）

▼四宮樹里先輩が仲間になった！

分かっちゃった（前書き）

※逆ハー女独白

分かっちゃった

なんでなんでなんでなんでなんで、何でよ!!
何で欠番していた『数持ち』の四宮が、よりにもよって女なの!?　欠番なんて、誰がどう考えても隠しキャラが登場する前振りじゃない!
まさか次の周からあの女が攻略対象キャラになるんじゃないでしょうね?　ふざけないでよ!!
私の世界は私をカッコイイ王子様達が囲んで、私のだけのために愛を囁いてくれるはずなのにっ。

それが何でポッと出の女に邪魔されなきゃならないわけ?
だいたい何なのよあの女!　女神様にお願いして美少女にしてもらった私と同じくらい綺麗で――……ううん、そんなはずないわ。
私の方が綺麗よ。
私より少し劣るくらいの容姿をしていて、何で今まで私の目に触れず世界に存在していたのよ!

あの女のせいで今年のクリスマスは誰にも誘われなかったし、私がわざわざ『皆でパーティをしよう』と誘ったのに全員に家業の手伝いを理由に断られたのよ!?
し、信じられないっ!　今まで一人で過ごしたクリスマスなんて一度もなかったのに、何よこれ何なのよ!!

今まで私に夢中で生徒会や風紀の仕事を放棄していたくせに、あの女が出てきた事で皆少しずつ私から離れていくし……。
確かに今回の周では生徒会と風紀を滅茶苦茶にして学園を壊す予

定だったけど、あんな邪魔者が出てくるなんて聞いてないわ！
よりにもよって生徒会と風紀を経験？　女子で一番権力のある人間？　あああああ、本当に目ざわり！

まったく、冗談じゃないわ。隠しキャラを出すために『学園壊滅ルート』に入ったっていうのに。
女神様に確かめようにも私から電話することはできないから連絡を待つしかないわ。でも、その連絡も不定期だからアテには出来ないわね。

考えなきゃ。このままだと学園が元に戻って私が誰とも結ばれない『ノーマルエンド』になってしまう。
そんなの嫌よ。三月頭の卒業式に告白されてエンディングを迎え、三月いっぱいは攻略したキャラと恋人になった状態で遊んで暮らすのが一番の楽しみなのに！
『学園壊滅ルート』なら今まで攻略した全キャラが私に告白をして、次の周が始まるまで好きな時に好きな王子様を選んで好き勝手できると思っていたのにっ！！

そもそも何で今回に限ってあの女が出てきたのかしら。
――ううん、違う。何で今まで”出て来なかった”のかしら。『数持ち』なら周回している私の耳に入ってもおかしくない設定なのに。
隠しキャラだからという理由に当て嵌まるなら今回の周で邪魔な存在なのは理解できるけれど、出てきたのは女よ。
女神様がくれた楽園は女を攻略対象になんてしないはずだから、あの女が次の周で攻略可能になる隠しキャラってことだけはありえ

ないわ。

それも、女神様の補正を受けた私に匹敵する容姿と才能、そして生徒会や風紀の信頼を得ている状態の女。こんな女、主人公の私と大差ないじゃない！

――え？　私と、大差ない……？

あ。

ああ、そっか。

そういうことなのね。
アハハっ、なるほど、そういう事だったのね？
ヤダ、私ったら分かっちゃった。全部気付いちゃった。

私と大差ない人物なんて、そう簡単に存在するはずないもの！
意図的に『四宮』として最初から存在するように仕向けたのよ。
つまりあの女、四宮樹里は、逆ハー世界には当たり前の『傍観者』なのね？

そうよ、そうに違いないわ。傍観していたけれど、その状態に我慢できなくなって表に出てきてしまった異端者なのね。
私が壊す学園を利用して、私をこの世界から追い出して『傍観者』の自分が主人公に成り代わるつもりなのよ。
私の世界を私から奪って、私の王子様を自分達のものにするつもりなのよ。私の楽園を横取りするつもりでしょう？

生徒会と風紀の王子様達と親交がある時点でおかしいと思ったのよ！
一年で生徒会ですって？　二年で風紀ですって？　三年で生徒会監査ですって？　あははっ、狙いすぎよその経歴！！
きっと三年目で誰かと結ばれる予定だったけど、私が転校してきちゃったから叶わなくなったのでしょう？
私が狙ってた王子様達をみーんな自分のものにしちゃったから、我慢できなくなっちゃんでしょ？

何が生徒会経験者よ、何が風紀経験者よ、何が生徒会監査よ、ただの男好きの女じゃない！！

私が歩んでいるシナリオの一つとも知らずに『学園壊滅ルート』に便乗してきてしまう低脳で浅はかな馬鹿女が、私に勝てるとでも思っているわけ！？

うふふ、いいことを思い付いちゃった！

私を利用して王子様達を奪おうとした罰をあの女に与えてやるんだから。

期末で主席になったら理事長の叔父様がご褒美をくれるって言ってたし、お願いしちゃおうっと。

だって叔父様も私のことが大好きで。これ以上ないってくらい可愛がってくれてるんだから。

きっと私が叔父様のお膝に乗って上目遣いでお願いすれば、すぐに頷いてくれるわ。

まっていなさい四宮樹里――……いいえ、私を邪魔する『傍観者』。

この世界の主人公である私の邪魔をするとどうなるか、学園を滅茶苦茶にしながら教えてあげるわ。

私に逆らおうなんてバカな事、二度と考えないようにしてあげるんだから。

私の世界と王子様に手を出した罪を、アンタにとって最悪の形で思い知らせてあげるわ。

『傍観者』は『傍観者』らしく、お姫様の私が幸せに暮らしているのを見ているだけに戻りなさいよ……！！

分かっちゃった（後書き）

ある意味正解である意味不正解。

日記（一月）

冬休みは短いものだと思っていたけれど、この時の私にとっては長い長い期間だったに違いない。

そんな気持ちが日記を読み返す私を後押ししたのか。何故かドキドキと嫌な音を立てる心臓を無視して、私は日記上の文字に目を走らせた。

▼一月の日記

一月〇日　（はれ）

新年あけましておめでとうございます。

今年こそ高校二年生の一年間が終わってくれますように。

お賽銭を奮発して長時間そう祈った私の願いは、神様に届いただろうか？

一月×日　（はれ）

今日から三学期。姫川さんは相変わらず自分の周りにイケメン達を侍らせて楽しそうに過ごしていた。

そんな様子を見て冬休み中のイベント事も男をとっかえひっかえにして遊んでいたんだろうな、と思った。実際見たわけじゃないけど。何となく。

隠し教室で四宮先輩を待とうとしたら、今日は用事があると携帯にメールで連絡が入っていた。
代わりに、明日の放課後に隠し教室に来て欲しいと文末に書かれていて明日が待ち遠しくなった。

一月△日　（くもり）

放課後、隠し教室で四宮先輩と会った。相変わらず綺麗な人だ。
四宮先輩は何も行動に移さなかった私とは逆に、冬休みの期間中に姫川さんについて色々と調べていたらしい。
ループしていた過去は調べた事で自分の存在が明るみになるかもしれないので避けていたようだが、今回姫川さんと接触したことで積極的に調査へ踏み切った、との事。陰に隠れたままの私は役立たずのままなので何だか申し訳ない。
先輩の話によると、姫川さんには不思議な点が多いらしい。その中でも特に大きな三点を先輩は私に教えてくれた。

まず最初に姫川愛華という人物が存在するという証明がない。簡単に言えば戸籍が存在しないのだ。しかし世の中には何らかの都合で親の戸籍に入れないケースもあるので有益な情報とは言い難く、頭の片隅で覚えておく程度で良いと言われた。

次に、姫川さんが多くの異性から好意を寄せられているという点についてだ。私は姫川さんに接触してしまえば世界中の男は姫川さんの虜になると思っていたのだけど、四宮先輩の調査によると対象となる年齢層があるらしい。

姫川さんに好意を寄せているのは十歳～八十歳までの広範囲で、それ以外は姫川さんのことを綺麗だとは思っても絶対的な存在だとは認識せず、中には逆に嫌悪感すら抱いている者もいた。その理由を尋ねると皆口を揃えて『胸焼けがする』と答えたそうだ。

最後に、四月下旬に学園に転校してきた姫川さんだが、それより前の情報がいくら調べても一切出てこないことだ。前の学校のこと、住んでいた場所、今まで彼女が歩んで来たはずの歴史が全て。まるで姫川愛華という人間が急に現れたような感じだ。

四宮先輩は引き続き姫川さんの情報を集めるらしく、他の疑問点と合わせて後日続きを教えてくれると言った。

何だか怖いな、と得体の知れない姫川さんに私が恐怖心を抱いていると、四宮先輩は『大丈夫よ』と肩をポンポンと叩いてくれた。

一生ついて行きます先輩……！

一月▽日　（はれ／くもり）

これは一体、どういうことだろう。

姫川さんの下駄箱と教室の机が荒らされていた。イケメン達全員を引き連れて登校してきた姫川さんはそれを見て涙を流し、イケメン達は怒り狂った。

冬休み前に生徒会や風紀の株が上がったことで、ファンがイジメを再開したということなのか。

イケメン達は四宮先輩のおかげで仕事をするようになったと言っても、やはり姫川さんが彼等の一番であることに変わりはないらし

く今日の執務は放棄されたそうだ。
生徒会と風紀を中心に一般男子生徒も犯人探しに名を上げ、午前中は騒ぎで授業にならなかった。
すごく、嫌な予感がする。この予感だけは当たらないで欲しいと何度も何度も強く願った。

一月□日　（くもり）

今日も姫川さんへの嫌がらせは続いている。
下駄箱と机、そして今回は体操服がビリビリに破られていた。姫川さんを守る！　とかアホなことを入っていた男共は何をしていたんだ。
でも、正直犯人がつかまらないままイジメが終わってくれればいいと思う。
未だに私の嫌な予感は消え去らない。

一月◇日　（あめ）

姫川さんの下駄箱と机を荒らした犯人が捕まった。
早朝に登校して下駄箱と机にゴミを詰めている所を、見回りの風紀と生徒会に現行犯逮捕されたらしい。
犯人は一年の女子生徒だった。単独犯かと尋問する風紀の問いに

彼女はこう答えたそうだ。『四宮先輩と文化委員の先輩達に命令されてやりました』と。

四宮先輩と文化委員副委員長二名が姫川さん、そして生徒会および風紀と共に校内放送で理事長室に呼び出された。

滅多に姿を見せないはずの理事長が今日に限って学園にいることは果たして偶然なのだろうか。

何とか四宮先輩に状況確認をしようと試みたけれど、今日は接触はおろか姿を見る事すらできなかった。携帯の電源は切られたままの状態で、隠し教室で待機してもそれは同じだった。

ああ、やはり嫌な予感は的中してしまった。しかも最悪の形で、だ。

一月●日　（あめ）

四宮先輩が理事長命令により三日間の謹慎処分になった。

理事長室で一体何があったのか。同席していた文化委員副委員長の二人は多くの女子生徒達に囲まれながら、静かに怒りながら詳細を話してくれた。

その場――理事長室にはイジメを行っていた一年の女子生徒と姫川さんの姿もあり、完全にアウェーでの尋問だったらしい。

シクシクと泣いている姫川さんを自分の膝の上に座らせた理事長は、一年の女子生徒に再度事実確認を行って『首謀者は四宮樹里だ』という言葉を告げさせた。

もちろん四宮先輩と文化委員副委員長の二人は無実だと反論したが、犯人の自供が何よりの証拠だと言って取りつく島もなかったそ

うだ。

しかも、理事長の話はそこで終わらなかった。

以前四宮先輩が証拠不十分として却下した姫川さんの授業免除の申請が、『四宮樹里の改ざんだった』と言い出したのだ。

この件に関しては授業免除の申請で生徒会や風紀の仕事を手伝ったという証明が必要だと、同席していたイケメン達もよく知っていたのに。遊び呆けて手を付けていなかった仕事に対してのモノなのは自分達が一番理解しているはず。それを片付けていたのが四宮先輩だということも。

本来ならば執務放棄の罪で裁かれるべきは生徒会と風紀なのに、四宮先輩がギリギリのところで喰い止めてくれていた形だ。それなのに、姫川さんの証拠を改ざんしたなんて。

前者の件は置いておくにしても、後者については誰もが自信をもって否定できることだ。何を言っているんだ、と息を吐いた四宮先輩と文化委員二名。だがしかし――、三人の耳には信じられない言葉が飛び込んで来た。

四宮先輩に守られたはずの生徒会と風紀が『姫川愛華は仕事を手伝っていた』と言い切ったのだ。

四宮先輩にとって、生徒会と風紀のメンバーが大切だということは文化委員の二人もよく知っていた。だからこそ、四宮先輩と一緒に堕落した双方に手を貸したのに。

『それが貴方達の答えなの？』と、少し震えた声で尋ねた先輩の言葉に誰も目を合わせて答えなかった。四宮先輩にとっては大切な友人だった彼等の――……、所詮姫宮愛華の犬でしかなかった男達の最低で最悪の裏切りだった。

その結果、首謀者だと判断された四宮先輩は三日間の謹慎処分。

文化委員副委員長の二人と一年の女子は厳重注意処分と反省文の提出となったらしい。
姫川さんの授業免除申請はその場で押された理事長印をもって受理となり、姫川さんは生徒会補佐の地位に逆戻りを果たした。

しん、と静まり返った場に誰かの声が響いた。『生徒会と風紀は地に落ち切った』と。
じわじわと広がる言葉の重さに誰もが瞳を揺らして言葉の意味を理解した。四宮先輩不在のまま、文化委員が『リコール』に動き出すことを――。
怒りに怒り切った女子生徒達は、もう誰にも止められない……。

一月▲日　（あめ／激しい雷）

四宮先輩と連絡が取れない。
何度電話しても電源が切られているというメッセージが流れ、何度メールを送っても反応がない。
ついに文化委員を中心とした女子生徒達の『リコール』運動が始まったというのに。

リコールの内容は現生徒会と風紀の解任と四宮樹里先輩の無実を認めろというモノだった。
しかしリコールを行うには全校生徒八割以上の署名と教職員半数の支持がないと達成されないという厳しい条件があった。
全校生徒の半数である男子が姫川さん派なので、叶う筈がない。

だけど、女子生徒達はリコール宣言することにも意味があると信じ、署名を集め続けた。

当然、私のところにも署名用紙が一枚回ってきた。

今はまだ未記入の白紙状態で、何をどうすれば良いのか……いくら悩んでも結論は出なかった。

一月◎日　（くもり／あめ）

最悪な状況には、更に最悪な事が重なるらしい。

生徒会と風紀のリコールを求める女子生徒達とは真逆で、今度は男子生徒達が『四宮樹里を生徒会監査から解任させる』ためにリコール運動を起こし始めた。

どう考えても、姫川さん庇護のためという理由としか思い付かない。

ぐちゃぐちゃだ。たった数日で滅茶苦茶になってしまった。

生徒会と風紀のリコールを求める数と、四宮先輩の生徒会監査解任を求める声は全く同じ。天秤が左右対称の状態で僅かに揺れ動いているだけの状態だ。

四宮先輩が大切にしていたものが、たった一人のせいで、姫川さんのせいでこんなにも簡単に壊れてしまうなんて。

私は未だ連絡のつかない四宮先輩の無事を祈りながら、物影でビクビク震えていることしかできなかった。

ああ、本当に役立たずすぎて泣く事さえも出来ないじゃないか――。

▲　一月の日記はここで終了している。

（あと数カ月で一年が終わるというのに、今になって学園の混乱は本格化し出した）

（こんな状態で終了までのカウントが始まっている一年は、どういう結末を迎えてしまうのだろうか）

日記（一月）（後書き）

結局は逆ハー女の思いのまま。

日記（二月）

混乱する学園の末路は一体誰に託されているのだろうか。
役者は謹慎処分を受けて連絡の取れない四宮先輩に、自作自演により再び自分の地位を取り戻した姫川さん。そして舞台袖に隠れたままの私。
過去と同じく一年の幕を上げた姫川さんが再び我が物顔で幕を引いてしまうのか。それとも――……？

▼　二月の日記

二月〇日　（はれ）

謹慎三日と土日を挟み、五日ぶりに姿を現した四宮先輩の左頬には湿布が貼られていた。
自分を囲む女子生徒達に四宮先輩は『転んだ』と言っているが、明らかに第三者に手を上げられたであろう怪我にざわつきは収まらない。
結局、予鈴がなるまで先輩を囲んだ女子の包囲網が解けることはなかった。

その放課後、一日中説明（正確には『転んだ』の一点張り）に追われた先輩が隠し教室に来てくれた。
先輩にとって何度も耳にした言葉だろうけど、言わずにはいられない。『その頬はどうしたんですか』と。
苦笑する先輩は少し返答に迷ったあと、四宮家をし切っている祖母にグーで殴られた事を語った。え、バァ様のグーパンチですか。

続いて話をする四宮先輩によると、例の件に関わった一年の女子生徒はやはり姫川さんの差し金だったようだ。

真相は意外にも関わった本人から聞く事ができたらしい。一年の彼女は謹慎処分で身動きが取れない四宮先輩の自宅まで来て、土下座で泣きながら謝ってきたのだと。

事件を起こした理由を尋ねれば、彼女は特待生枠で学園に通っている一般家庭の者で今回の事件を起こさないと強制退学だと学園長から脅されていたと答えた。更に話を掘り下げて聞けば、彼女は父子家庭で逆らえば父親の仕事も妨害するとも告げられていた。

咽び泣く彼女の謝罪が四宮先輩の家族の耳に入らないはずもなく、彼女の謝罪を受け入れて帰らせた後に四宮家の最高権力者であるバァ様に全て包み隠さず話すことになったのだとか。

結果、『四宮を裏切った』と明るみになった事で他の『数持ち』の一族に縁切りを宣言するまでに至った。

これは四宮先輩の家にとっても大きな痛手であり、『多くの者に混乱と迷惑をかける罪を自覚しろ』という意味でバァ様にグーパンチをお見舞いされたらしい。

学園内だけでは済まなくなってしまった今回の一件で、『数持ち』に大きな衝撃が走るのは確実だ。

先輩の『四宮』は正しい道を進むに違いないが、他の『数持ち』がどうなったのかは今のところ詳しい情報が無い。

まぁ、もうイケメン達がどうしようとも名誉を挽回するなんてことは無理に決まっているだろうけど。

差し込む夕日に照らされた先輩の横顔はスッキリしているように見えたけど、やはり少し寂しそうだった。

二月×日　（くもり）

一年生のあの子が学園を辞めて別の学校へ転校したらしい。
裏切り者として周りからの風当たりも強く耐えられなくなったのであろう、という噂だった。

モヤモヤした気分で隠し教室で佇んでいると、四宮先輩が彼女の転校を手伝ったのは自分だと教えてくれた。
どうやら交友関係を駆使して特待制度のある学校を探し、転入試験を受けることができるよう手配をしたらしい。
懸念されていた彼女の父親の仕事も、四宮先輩の家の力で理不尽な手出しは出来ないようになっているそうだ。
先輩を褒め称える私に『試験に合格したのは本人の力よ』と優しく笑う四宮先輩は、私が今まで出会った女性の中で一番綺麗で優しい最高の人だと心の底から思った。

……そういえば、四宮先輩の家業って何だろう。

二月△日　（はれ／くもり）

相変わらず女子生徒側のリコール運動と、それに対立する男子生徒側のリコール運動は続いている。
四宮先輩は『その気持ちは嬉しい』と言いながら女子生徒達を落ち着かせようとしているが、少し落ち着けばタイミングを見計らっ

たような男子生徒側の罵りによってムキになってしまうという悪循環が生じていた。

もうすぐ先輩も卒業だというのに、学園の騒ぎがおさまる気配は全くない。

二月▽日　（くもり／はれ）

最近、よく『数持ち』の人が学園を休んでいる。

四宮先輩が謹慎処分を受けた日から仕事をせず姫川さんにベッタリな状態に戻っていたが、姿を見ないことの方が多い気がする。

代わりに姫川さんには一般男子生徒の中でも特に顔の良い者が数名護衛のように居り、相変わらずのお姫様扱いを受けていた。

その表情からは『数持ち』の彼等を心配している様子は窺えない。

何か聞いているのだろうか？

二月□日　（くもり）

『数持ち』の者がよく学園を休んでいる理由がわかった。

それは四宮先輩からの情報ではなく、家が『数持ち』と同系列の業界に関わっている一般の生徒からの情報だ。

『四宮』に絶縁宣言されたことで各業界に多大な影響を及ぼした

ため、ここ数カ月間の学園での様子が各家に伝わってしまったそうだ。
人の上に立つ地位にありながら職務と責任を放棄したことに『数持ち』の各家は怒り、彼等に然るべき罰を与えた。
その罰とは人によって違うが、彼等が学園女子生徒の信頼を失っただけではなく血の繋がった家族の信頼をも失った事は確かだろう。
姫川さんにとっての幸せな場所は学園にあるけれど、彼等にとってのそれも同じなのかな。

二月◇日　（くもり／あめ）

もはや彼等には姫川さん以外に縋るものはない。
普段通り気丈に過ごしているつもりかもしれないが、時間さえできれば姫川さんの傍に来る彼等は捨てられる前の子犬のようだ。
そんな彼等に優しく微笑む姫川さんは変わらない愛を与え続けているのだろうか。
こんな彼等に痛々しい目を向けることしか出来ない私は、薄情な人間なのだろうか。
四宮先輩に質問しても、長い沈黙と悲しい頬笑みが返ってくるだけだった。答えなんて何処にもないのかもしれない。

二月●日　（あめ）

四宮先輩に隠し教室に呼び出された。
指定された時間前に教室で待っていたけれど、時間になっても先輩は現れなかった。
時間に正確な先輩が遅れるなんて、と不安に思っていると手にしていた携帯がメールの着信を伝えた。送信者の欄には先輩の名前。でも、メールに書かれた『そのまま待機』の文字を見て私の頭の中は疑問符でいっぱいだった。

その約一分後。
隠し教室のマジックミラーの先に四宮先輩と姫川さんが現れた瞬間、心臓が飛び出そうになった。
私の姿は二人に見えていないはずだけど、あたかも三人で密談しているような状況に心臓の音がうるさい。

『ふふふ、急に呼び止めちゃってごめんなさぁい』と先に口を開いたのは姫川さんだった。
恐らく、一人で徘徊する予定のコースになっているこの西校舎二階で四宮先輩の姿を見つけ、声を掛けたのだろう。四宮先輩は先輩で私と約束していた隠し教室へ向かう途中で。
先ほどのメールは隠し教室から私が現れないよう指示した上で、姫川さんとの会話を私にも聞かせようという作戦なのだと思う。

『私、先輩にお話があったんですぅ。たーいせつな相談なんですけどぉ、いいですかぁ？』と聞いている者を不快にさせる話し方でニコニコする姫川さんに、四宮先輩は逆に表情を崩さない。
しかし先輩は何を思い付いたのか『ここでは誰かに聞かれるかもしれないわよ？』と姫川さんとは別の方向――そう、私の居る壁の方を向いて姫川さんに告げた。
ドキン、と一際大きな音で心臓が鳴った。先輩の意図が汲み取れ

ない私は、ただこの会話を一言も聞き洩らさないようにするしかない。

『大丈夫ですよぉ。今は誰も入って来れないから』と、さも当然だと言いたげな姫川さんは話を続けた。

『女子のみんながリコールを求めているの、知ってますよね？』という言葉に、ピクリと眉を動かして反応した四宮先輩。『貴女一体、何が目的なのかしら』という先輩の問いに、私も同じ気持ちだと頷きながら返事を待った。

そんな四宮先輩の反応を見て、姫川さんは『私はただ先輩に認めて欲しいだけです。私に負けたってことを。本当はもっともっと酷い事をして終わりたかったんですけど、時間もないから諦めたんですよぉ』と男子達を魅了した美しい笑顔を浮かべ、『先輩がどう足掻いても私には勝てませんよ。だって私は愛される存在だから。愛されて当然の存在、姫川愛華だから』等と狂っているとしか思えない言葉をスラスラと生み出していく。

『知ってました？　私が皆にちょっとお願いすれば、リコールなんて簡単にできちゃうんですよ。既に集まった学園の半数に値する女子生徒達の署名に私がお願いした男子生徒達の署名がプラスされれば、どうなっちゃうと思います？』と相変わらずの猫なで声で言った姫川さんに、今度こそ四宮先輩は視線を鋭くした。

静かな怒りを含んだ先輩の『彼等は貴女のオモチャじゃないのよ』という言葉に、姫川さんは笑うだけでそれ以上は何も答えなかった。

自分を慕っている生徒会や風紀の彼等を引き合いに出せる神経を疑った。

全てを失いつつある彼等には、姫川さんという全てを賭けた存在に縋るしかないというのに。

怖い――。

天使のような容姿で酷いことを平気で行える姫川さんが、とても恐ろしく見えた。

誰もを魅了してもおかしくない笑顔の先には、自分を中心とした世界しか存在していないのだ。

携帯電話を片手にして、いつでも有言実行できるのだという事実をチラつかせる姫川さんに、四宮先輩が頷くのを私はただただ震えながら見守ることしかできなかった。

かつての友人を最後まで心配する四宮先輩の優しい心までも弄ばれているような気がした……。

二月▲日　（くもり）

姫川さんと話をした翌日である今日、四宮先輩は文化委員全員を一つの教室に集めた。

私は文化委員ではないので同行することができないため、先輩に無理を言って携帯を通話状態にしたまま集会の会話を聞かせてもらうことにした。

先輩の話はとても簡潔だった。これ以上の混乱を避けるためリコールを取り下げて欲しい、と。

驚愕して反対の意見に熱を上げる文化委員達は、口々に『先輩への裏切りを許すのですか！』と叫んだ。

それはまるで学園の上に立っていた彼等を信じていた自分達の心の叫びを代弁したモノのように、私には聞こえた。

もちろん、四宮先輩もそれを理解していた。
だから先輩は文化委員達の心の叫びに全部分かっていることを伝えて、静かに涙した。

『本当にごめんなさい。でもね、彼等が私を裏切ったという事実があっても、――私は彼等を絶対に裏切ったりはしないわ』と震えて掠れる声は先輩の無念さを伝えている。

この言葉を、最低最悪な形で先輩を裏切った彼等に聞かせてやりたいと強く拳を握りながら思った――。
文化委員達が悔しさに耐えきれず泣き出す声を電話越しに聞きながら、私は堪え切れず隠し教室の机に拳を思いっきり叩き付けた。

二月の某日の本日。たった今、この瞬間――……私達は姫川愛華に負けたことを認めた。
視界が滲んだのは机に叩き付けた拳が痛かったからだ、と自分に言い聞かせた。

二月■日　（あめ）

各クラスの文化委員から四宮先輩の意志が伝えられ、多くの女子生徒の涙を代償として生徒会と風紀に向けたリコールが取り消された。
それから暫くして、姫川さんの『リコールなんてダメだよぉ』という一声によって男子生徒達が起こしていた四宮先輩に対してのリコールも取り消された。

まったく重みの違う両者の言葉に、疑問を抱いた者は誰も居ないのだろうか。
もうすぐ卒業式なのに、学園の中は違う悲しみでいっぱいだった。

▲　二月の日記はここで終了している。

（天使の容姿で悪魔の心を持つ彼女が、今回の幕を引く〝勝者〟）
（戦いに負けた私達の二年目（みらい）に、明るい光など存在しているのでしょうか？）
（その問い掛けに、答えてくれる〝神様〟なんて存在しなかった――）

日記（二月）（後書き）

日記回想の周は逆ハー女の勝利でした。

日記（三月）（前書き）

三月は特に行事がないので短めです。

日記（三月）

桜が咲き誇る時期には少し早く、代わりに桃の花が可愛らしく色付く三月。
先輩は繰り返される一年の中で同じ風景を見てきたのだろうけど、今回は友人との別れとは別の意味の大きな悲しみを背負って学園を後にする。

そしてその悲しみを新たな決意に変えて、更にまた一年を繰り返す。
今度は傍観する者ではなく姫川愛華に対抗する者として真正面から立ち、先輩の力になるために介入しようと心に決めた私を伴って――。

▼ 三月の日記

三月〇日　（はれ）

三月の行事は卒業式だけだと思っていたので、またもやテストの存在を忘れていた。
三年生は卒業云々が決まっているので無いのだけど、残りの二学年は一年間のまとめとして実施されるのだ。

卒業式まで自由登校の三年生である四宮先輩は『数持ち』との絶縁のせいで実家が忙しいらしく、メールで連絡し合うだけの状態だった。
実はテストの存在も四宮先輩の『テスト頑張ってね』というメー

ルで思い出したくらいだ。物忘れの激しい病気の一種かもしれないと自暴自棄になりかけたが、先輩の応援が嬉しかったので図書室に足を運んで勉強をした。

そういえば、今回は生徒会と風紀のイケメン達の姿を見ていない。三年の会長と副会長、風紀委員長は自由登校だから来ていないと仮定しても残りのメンバーはどうしたのだろう。

三月×日　（はれ）

テストの結果発表だった。今回は先輩の応援があったので調子に乗って三十三位。危ない危ない……。

姫川さんは前回の一位から順位を二つ落として元通り三位に。あと、テストを受けたはずのイケメン達の名前は見当たらなかった。

女子生徒達も嫌味すら言おうともせず、存在ごと無視しているような感じだった。

三月△日　（はれ）

今日は卒業式だった。

生徒会長という肩書を持ったままなので答辞を行うのは会長だが、在校生（特に女子）からの視線は冷たい。まぁ自業自得なので仕方が無いことだけれども。

式は特に混乱もなく順調に終わり、四宮先輩は女子生徒達に囲まれて近づける状態ではなかった。
そんなことは先輩も私も予想済みなので、私が春休みに入る数日後に運動部活動のために解放されている学園で会う約束をしている。
春休みに入ると姫川さんは旅行だと群がる一般男子生徒達に言っていたので先輩と外で会うチャンスでもあるが、隠し教室で会うことを続けるのは念には念をという先輩の案だ。

春休み、姫川さんの取り巻きの彼等はどうするのだろうか。
ふとそんな事を思って辺りを見回してみたが、四宮先輩が同級生や後輩に囲まれて打ち上げに向かう後ろ姿しか見えなかった。
――……きっと、イケメン達はお姫様と一緒にいるに違いない。
もう姫川さんしか彼等には残っていないのだから。

三月▽日　（はれ）

春休みに入った。
何故か三月に入ってから不思議と時間が進むのが早い気がする。
夏休みや冬休みとは違って特に宿題も出ていないので、四宮先輩に会うまで情報の整理でもしておこうかな。

三月□日　（はれ／くもり）

隠し教室で私服姿の四宮先輩と会った。エレガント系の服装がマ

ジ素敵ですお姉さま！

とりあえず電話やメールでしか言えなかった『卒業おめでとうございます』を直接告げると、先輩はニッコリ笑ってくれた。

そんな和やかな時間もそこそこに、早速本題に入りループの主役である姫川さんの話になった。

今日この隠し教室に集まったのは、この後ループするであろう二年目について話し合う為でもある。

以前にも聞いた話だが、今までのループでは姫川さんは必ず誰かと恋人同士になり、誰が見ても幸せだと言える状態で一年を終えていたらしい。

意外にも在学中は恋人となった者に一途で、多少他の異性と親しくなったとしても今回のように最初から全員に気のある振りなどせず、イベント事は必ず最終的に恋人となる者と一緒だったそうだ。

それが何故か今回に限って最初から男を侍らせ、自分は皆に愛される存在なのだと狂った思考を持ったまま行動をし始めたのだ。

姫川さんの目的はよく分からないけど、先輩は『姫川愛華は生徒会と風紀の情報を知りすぎている』ことを今回のループで確信したと言う。

対象者の心に確実に響く言葉で『この人は自分を理解してくれている』と認識させ、さらに甘い言葉や行動を繰り返すのだと。

優しい言葉や慰めの類ではない。まるで計算されたようなそれは、『好意を持たせるため』に用意されたモノにしか思えない。

しかも、今回は過去に愛し合ったはずの者を四宮先輩との掛け合いに引き出した。少しくらい情があったもおかしくない彼等を何の躊躇いもなく切り捨てようとし、結果的に彼等から全てを奪い去った。

――このことで、逆に先輩は姫川さんからかつての友人達を取り戻す決心がついたらしい。

表舞台に立ってしまった事で完全に対立してしまった四宮先輩は、姫川さんが転校してくるまでの間に色々下準備をして敵を迎撃する予定だという。

他にも幾つかの情報について独自で調査を行ってきた先輩に、私も拳を握って立ち上がりながら『次の年は文化委員に入って先輩をお手伝いします！』と宣言した。

が、先輩は横に頭を振って『貴女は影として動くべきだわ。時が満ちるまでは決して私のように表舞台に立ってはいけない』と私の介入を否定した。

尤もな先輩の言葉にガックリと項垂れつつ再び席に座り、言葉を反芻して『先輩の影って一体……？』と分からない点を質問する。

しかしこの質問にも先輩は頭を振って『よく覚えておきなさい。貴女は私の影ではなく、姫川愛華の影なのよ』と否定した。

思いもよらない言葉に、ますます頭を悩ませる私に先輩は『今は意味が分からなくてもいいわ。とりあえず最初は私の指示に従いながら、貴女のクラスの委員長や一年のあの子を助けてあげてましょう』と言いながら私の手を握り、次いで心までも鷲掴みにする最高の言葉をくれた。

『ふふっ、呆けている時間はないわよ。私、結構人使いが荒から覚悟しておくことね。何たって貴女は私の相棒（パートナー）なのだから』と。

これまで何の役に立てなかった自分が、やっと必要とされている

のだと思えた。
　ウジウジして肝心な所では陰に隠れて嵐が過ぎるのを待っていることしかできなかった情けない私が、四宮先輩の役に立てる。
　先輩の言うように、今の私ではまだまだ表舞台に立てないだろう。努力も覚悟も知識も想いも、先輩どころか姫川さんにも劣っているような状態の私が自分で動き回って何ができるのか。
　先輩が『姫川愛華の影』になれというなら、そうしよう。この恐ろしいループされる世界を抜け出して先輩と一緒に平和な生活を取り戻すことができるなら、私は何だってできる。

『姫川愛華は自分で言っていたわ。愛されて当然の存在なのだと。じゃあ私達は彼女に愛される存在でないことを、分からせてあげる必要がありそうね？』と少し意地の悪い笑みを浮かべた先輩に、私はただ『はい！』と気合十分の返事をした。

（『確証を持つには未だ不十分だけど、ループを解くカギは彼女が頑なに拘っている〝愛〟というキーワードに関連しているはず。だから――……』）
（先輩、私がんばって先輩のお役に立ちますね！）

　両手の指で数えられる日数の先にありながら再び巡る『高校二年生の一年』に向けて、私は初めて前向きな気持ちのまま今こうして日記を書いた――。

▲　三月の日記はここで終了している。

「う、わっ！」

パチン、と頭の奥で何かが弾けて日記に書いてある通りの一年が私の中に蘇った。

忘れていた何かが強制的に上書きされていた記憶を正常な状態に戻し、『今』の私に『過去』の私を取り戻させる。

ズキズキと、頭が痛む。

呼吸をするのが苦しくなって、浅い息を何度も何度も繰り返す。

くるくると変わる情景の中には、笑い合う姫川さんと生徒会や風紀の人達。

しかしそれは急に振り始めた雨により黒ずんだ色に変色し、吹き荒れた風により空白に戻された。

パラパラと捲れる記憶（アルバム）の中には、文化委員の皆と一緒に涙を流す四宮先輩。

バサバサと上から振って来る記憶（しゃしん）の中には、机に拳を叩きつけて唇を強く噛み締める私。

ガラガラと崩れた偽りの中から出てきたのは、日記に書かれていた通りの悲しさと悔しさに溢れた私の記憶。

違う、違う、違う。

そうだ、私は知っている、覚えている。

これは全部、私が見てきたことで、悪い夢なんかじゃな。

誰かが記した物語でもなく、誰かが語った絵空事でもない。

これは全部、私が、――――私達が過ごした『現実』っ……！！

パチン、と再び音が弾けて頭の中が一気にクリアになった。
感じていた頭の痛みや、息苦しさは嘘のように消え去っていた。

ループの恐ろしさに恐縮し、背を向けていた私はもういない。
流れ込んでくるのは、見ていることしかできなかった愚かな自分の悔しい気持ち。
沸き上がってくるのは、四宮先輩に手を取られて告げられた『相棒』の言葉に感動した気持ち。

「――っ、わたし、全部、ちゃんと思い出しましたよ、四宮先輩……っ！」

過去の記憶を取り戻した私の手元にあったはずの日記は、綺麗さっぱり消え去っていた――。

（（ループを抜け出すために相棒となった二人。その戦いの全ては、ループで来る越される”二年目”に持ちこされた――。））

日記（三月）（後書き）

日記は記憶を取り戻すための道具でした。
なぜ日記は主人公の手元に残っていたのでしょうか？＾＾

エンディング？（前書き）

※逆ハー女視点

エンディング？

電話で聞いた女神様からのアドバイス通り、生徒会と風紀の王子様達を虜にして学園を滅茶苦茶にしてやったわ。

途中、四宮樹里なんていう傍観者が現れて少し慌てたけど、所詮私の敵なんかじゃなかった。

この世界の主役の位置にいる私を蹴落として自分がヒロインになろうだなんて、厚かましい考えを持った雌豚に愛される存在の私が負けるはずないじゃない。

でも本当にいい気味だったわ。

私を庇って王子様達があの女を裏切った瞬間の、あの震えた声！

私の一声で王子様達をリコールできると教えてあげた時の、あの悔しそうな目！！

思い返すだけで笑っちゃう。どうせならあの場で土下座でもさせれば良かったかしら。

でも、むしろ私に感謝して欲しいわね。本当はその辺の不良達でも誘惑してあの女を襲わせるつもりだったのよ？

まぁ、それは次の機会にしておきましょう。次にもし逆らってきたとしたら、今度こそ肉体も精神もボロボロにして立ち直れないようにしてあげるんだから。

うふふっ、その時のことを考えると、また笑いが込み上げてきちゃった！

「愛華、何だか機嫌が良さそうですね」

柔らかい声のした方向に目を向けると、童話の中から出てきたよ

うな容姿をしている玲先輩の微笑み。
玲先輩は王子様達の中でも特に優しくて、一番私を可愛がってくれて、一番私をお姫様扱いしてくれる王子様。
――そして、誰よりも私の愛を求めて私に依存し続けているカワイソウナヒト。

他の王子様達もそう。結局はみんなカワイソウな人なのよ。それでいて、どうしようもない子供。
本当の自分を見てほしくて、抱える闇に気付いて欲しいと心で叫んで、でもプライドが許さずに泥沼に沈んでいってしまう、愛に飢えた人達。

ループする度に思った。彼等を救えるのは愛に溢れる私だけだって。
私が彼等の抱える闇に優しく触れて、彼等の光になって、愛しているのだと言えばそれ以上の愛が返された。そして私が心無い言葉をかければ輝きを取り戻した瞳が再び濁った。
とてもとても、素晴らしいことだと感じたの。私の行動一つで一喜一憂して、縋る様に私の愛を求めてくる王子様達。
女神様と契約した時に『繰り返すだけ未来が変わる』と言われたけど、正にその通り！
確かに私が取った行動によってエンディングが幾つか分岐して、お気に入りの王子様のエンディングを違う形で幾つも幾つも経験してきたわ！！
だからね、たった一人だけを愛して愛されるなんて本当はつまらない事だって気付いたの。だってだって、たくさんの人に多くの愛を囁いた方がより多くの愛が返ってくるんですもの。
せっかく女神様に『魅了（チャーム）』の補正までかけてもらってるのに、それを使わないのも勿体無いじゃない。

……それに今思えば、全部のフラグと選択肢を一つも間違わずに迎える純愛ベストＥＮＤ以外、実は面倒なエンディングが多かったのよね。

確かに恋人同士になれた当初は良かったわ。私も攻略するために他のキャラに目移りなんてしなかったし、大恋愛の末にエンディングを迎えた。

だけどね、違ったの。王子様達との愛の重さが。

王子様達は私を唯一だと扱って、私の唯一も自分だけだと信じて疑わなかった。

恋と愛を結婚に結びつけるならそれで良いわ。でも繰り返してより多くの愛が欲しい私は唯一なんて絞れない。

ああ、王子様達の唯一が私なのは構わないのよ？　でも私は違うってこと。

だから、それが同じ”女”には本能的に分かるみたいね。純粋な子供や悟りの強い老人にも。

私の『魅了（チャーム）』は誰にでも通用するはずだったのに、私がこの世界を繰り返し楽しむたびに反感が強くなっていったから。

それに気付いてからのエンディングなんて本当に大変だったわ。

一通り純愛ＥＮＤを迎えてから、純愛じゃないエンディングを一番最初に試した会計の穂高くんルートでは、三人のお姉さん達に猛反対にあって結局駆け落ちに近いエンディングになってしまったし。

わりとお気に入りだった会長の蓮先輩のエンディングも少し気を抜けば、弟や妹に加えて当主のお祖父さんまで大反対するんだもの。やってらんない！

色々上手くいって家族に気に入られた、と思った副会長の玲先輩

なんて実は愛人の子供で継母が初対面から私にケチをつけてくるのよ。もう本当に最悪っ！！

だから仕方なく、ここ最近はまた純愛ルートを繰り返してみてたんだけど。

――女神様のおかげで、もう必要ないの。必要なくなったの。だって念願の逆ハーレムＥＮＤへの新しい手掛かりが手に入ったのですもの！

私の肩に手をかけてニッコリと笑う玲先輩に、私も同じくニッコリと笑ってみせた。

それを見て蓮先輩が少しだけ不機嫌な顔をして、玲先輩から私を引き離す。

「その話はここから移動してからにしようぜ」

「そうですね、面倒な卒業式も終わったのですから場所を変えてゆっくり……」

軽く身をよじることで放れた二人の手からヒラリと距離を取り、後ろにズラリと並ぶ王子様達に私は振り返った。

もうそろそろ、本音を暴露しちゃってもいいわよね？

「あははっ、冗談じゃないわ。いくら顔や家柄が良いからって、後継ぎでも何でもないアンタ達と一緒にいるはずないじゃない」

「……愛華？」
「ど、どうしたの、愛華ちゃん」

硬直した状態で何とか私の名前を読んだのは風紀委員の正臣先輩。
それを追い掛けるようにして、声を震えさせているのは生徒会書記の伊織くん。
他のみんなも、声には出さないけど驚きを隠せないでいる。ふふ、そんな顔もダイスキよ？

「ねぇ、蓮先輩。お祖父様に言われたのでしょう？　『お前のような奴に跡を継がせたりはせん！』って。
ねぇ、玲先輩。義母様に言われたのでしょう？　『愛人の子である貴方と同じ場所に住みたくない』って。
ねぇ、ねぇ、ねぇ、みーんなも一番言われたくないことを大事な家族に言われちゃったんでしょ？　もう家族じゃないって言われちゃったんでしょ？　あははっ、必要ないって言われたのでしょう！？」

くるり、くるりと回りながら一歩ずつ王子様達との距離をとる。
私の口から飛び出た言葉が信じられないようで、己を耳を疑っている王子様達は微動だにしない。ううん、動けないだけかも。
その間に私はすぐには捕まえられない程度の距離を保って、王子様達が慕ってくれた笑顔と声でこの物語の終止符を私自身が打つ。
幕を上げたのは私なのだから、幕を下ろしてあげるのも私の役目だもの。

「そんな何の利用価値もない人間は、私だって必要ないわ。知ってる？　愛は心を満たしてくれるけど、お腹や欲を満たしてくれないの。知らなかった？　”今回の”アナタ達は、私に一瞬たりとも愛されていなかった事を」

パリーン！　と、グラスの割れるような音がして私と王子様達の間に見えない亀裂が入った。

私の方を泣きそうな顔で見ながら何かを叫んでいる王子様達の声は、亀裂によって遮断された先に居る私には聞こえない。

ガクン、と膝から崩れ落ちたのは玲先輩と伊織くん。

先に進めない亀裂に走り寄って拳を叩きつけているのは蓮先輩と正臣先輩。

呆然としたまま私を見ているだけなのは他の王子様達。まだ理解できていないようね。

亀裂の先で、ぐにゃりと歪む世界を目の当たりにして私は確信した。

これが女神様の言っていた『崩壊エンド』ってモノなのね、と。

制服のポケットから携帯を取り出して王子様達の好感度確認画面を見れば、急降下していく好感度のゲージ。

攻略対象キャラの簡易プロフィールを確認できる画面に移動すれば、名前とシルエットがブランクの状態のキャラ枠が一つ増えていた。

「ふふっ、これで隠しキャラが登場するのね！」

堪え切れず笑いだせば、タイミングを見計らったかのようにメールの着信を告げる携帯。

壊れて行く世界に未だ存在する王子様達を尻目に、届いたばかりのメールを見れば差し出し人の欄には『女神様』の名前。

『崩壊をスキップして、新しい物語を始めますか？　ＹＥＳ　ｏｒ　ＮＯ』

画面に映し出された文字を読んで、カチカチと急いでカーソルを目的の文字に合わせる。

ガラガラと崩れ始めた世界には未だ私の名前を読んでいるであろう王子様達が見えたけど、どうせ消えてしまう彼等に与える愛なんてこれっぽっちも残っていない。

「そんなの、イエスに決まっているじゃない女神様！」

ポチッとボタンを押した瞬間、歪みながら崩れていた世界は一瞬にして白い光に包まれた。

そして光が全てを包み終わって出来あがった新たな白い空間に、私はひとりで存在していた。

そう、これがいつもと同じ『始まりの場所』――。

真っ白で何もない空間で、再び女神様の声を聞いて新しい物語へ

の扉を開くの。

さぁ、もう何周目か自分でも覚えていない私だけの愛の楽園が、また再び始まるわ……！！

（さようなら私の王子様達。次の世界でも私の愛を求めて、頑張って私にアプローチをかけてね！）

（（彼女の携帯のエンディング一覧ページに、新たなエンディングが一つ追加された――。））

エンディング？（後書き）

一応、イケメン達も逆ハー女の言葉によって奈落の底に突き落とされたような感じです。
逆ハー女は次の周をプレイするためにスキップ機能を使って『始まりの空間』へ移動しました、とさ。

さて、これにて第一章は終了です。
ここまで読んで下さってありがとうございました。

プロローグ？

真っ白な空間に、大きな鏡が一つあった。
その鏡の前には背を向けた人物。寂しい空間に存在するのはたったそれだけ。

鏡は最初何も映していなかったが、ポタッと透明な水に深い紫色の液体が落ちたように波紋が浮かび上がり、徐々に鏡全体に広がって黒と紫の禍々しい色を映しだした。

ふむ、とそれを見て何かを考え込んだ人物は何を思ったのか、腕を鏡に付けて力を入れてみた。
すると、触れた部分から腕がズルリと中に入り込み、肘の深さまで入り込んだ所でピタリと止まった。
しかし、ぐいぐいと押してもそれ以上中に入り込めない。
そのことに人物は溜息を吐き、諦めて腕を引きぬくと同時に一枚の紙を鏡の中から取りだした。

紙に書かれていたのは、ある人物の名前。
その名前は――……。

小さな違い（前書き）

今話はちょっと短めです。

小さな違い

再びやってきた『高校二年生』の初日。校門やクラス表の前で記憶の通りのやり取りをこなし、私は足を運び慣れた二年二組の教室にいた。

姫川さんが転校してくるのは四月の下旬なので、それまでは四宮先輩と隠し部屋でじっくり対策を練ることができる。だから今日は始業式が終わった後に会おう、と三月最後のメールで先輩と約束をしていた。

何かと忙しそうな先輩とはそのメールを最後に一週間ほど連絡を取れていない。

早く先輩に会いたいなと数時間後に叶うことを心待ちにしつつ、顔には出さず周りの会話に耳を傾けていた。

絵理を含む顔見知りの女子達と一緒に適当な雑談で時間をつぶす中、話題は自然と未発表の担任のことになった。

私は誰が担任になるのかを知っているので相槌をうつだけだった、——が。

「担任と言えば、絵理と加奈子は去年最高だったんでしょ？」

「何たって教師の中で人気ナンバーワンの六井先生だったもんねぇ！」

「あはは、羨ましいでしょう？　ねっ、加奈ちゃん！」

「……は？」

絵理の言葉を脳が処理しきれず、一瞬自分の中で時間が止まった。

それもそのはず。確か高校一年の時の担任は定年間近のお爺ちゃん先生だったのに、これから教室に姿を現すであろう生徒会顧問の六井湍先生が去年の担任だったと言っているのだから。

厳密に言えば「去年」という単語は私にとってループしている年を示すのだから正解だ。だけど、ループに気付いていない絵理や他の女子生徒達には違う。

何だこれ。ちょっと意味がわからない。

絵理本人もお爺ちゃん先生のことが好きだと自分で言っていたので間違うはずなんてない。

去年の数学担当が六井先生だった、という言葉を集中して聞いていなかったことで聞き間違えたのだろうか。

「絵理、去年の担任は――」

「立ってるヤツは席につけー。担任様のお出ましだぞー」

タイミング悪く私の声と重なって鳴ったチャイムと同時に教室の扉を開けて入ってきたのは、記憶の通りブランド物のスーツをビシっと着こなした六井先生。

先生を見てきゃあきゃあと騒ぐ女子達の反応も過去と同じだ。でも、さっきまで一緒に話していた子達に向かってピースをしている絵理の反応は違っている。

何かがおかしい。ほんの少しだけど何かが違う。

一年目に巡った時と同じように嫌な予感がして、私は耐えるように机の上で自分の手をぎゅっと強く握った。

とりあえず落ち着いて自分でも色々考えてみようと、力の入れ過

ぎで白くなった手を見つめ続けた。

一体何が違う？　記憶していたこと少しの誤差が出ることくらい当たり前だとは認識していた。

だけどコレは絶対に同じじゃない。だって変わるのが未来じゃなくて過去だなんて。

日記で取り戻した記憶がまだ完全じゃなかった？　ううん、そんなはずない。間違いだったなんてこともありえない。

どうしよう。もっと周りに探りを入れて調べた方が良い？

それとも早く四宮先輩に報告して一緒に考えてもらった方が良い？

ダメだ、こんな少ない情報じゃ逆に迷惑をかけるだけ。やっぱり絵理にもう一度話を聞いて――。

「去年に引き続きまた平田か。ぼんやりするのはホドホドにしとけって言っただろ」

「っ！？」

ポン、と何かが頭に触れて身体が跳ねあがった。

考えている最中に名前を呼ばれたという理由もあるけど、それ以上に先生の口から出た言葉に驚いたからだ。

先生も絵理と同じようなことを言っている。私がループに気付いた初日に先生本人に言われたこと『高校一年生』の時として認識しているのだ。

やっぱり未来が変わらず、過去が変わっている。

私が日記を読んで思い出したから？　ううん、この部分は日記を

読まなくても覚えていた記憶のはず。だったら一体何が原因で？

「平田？　どうした、具合でも悪いのか？」

「え、いいえ、ぼんやりしてただけです。あの、すみませんでした」

「顔色が良くないな。今から始業式だが、無理そうなら早めに言えよ？」

「は、い……」

チラチラと何度か私の方向を振り返りながら教卓の方へ戻っていく先生に視線を向けたまま、私は制服のポケットの上から携帯を撫でた。

使うわけではないけど逸る気持ちが自然と私の手を携帯へ導く。たぶん私一人でウジウジ考えていられる問題じゃない。

できるだけ早く四宮先輩に報告しなきゃ。始業式とＨＲが終わったら西校舎の隠し教室へ急ごう。

「今日はパパッと各委員会も決めるから今の内にどの委員会に入るか考えておけよ。じゃあこれでＨＲは終わりだ。委員長」

「き、起立っ、礼！」

前の記憶と同じように、先生が見た目だけで委員長に指名した彼女の号令に従って揃って頭を下げる。

早く早くと心臓が激しく脈打って急かしても、時間は私の思うようには進まない。だから私は嫌な汗が噴き出る状態を落ち着けるた

めに、呪文でも唱えるかのように四宮先輩の名前を心の中で呼び続けた。

そうすることで、少しでも時間が早く進んで先輩に会える気がしたから――。

小さな違い（後書き）

忘れがちですが主人公の名前は『平田加奈子』です。
親友に呼ばれている愛称は『加奈ちゃん』になります。

大きな違い

始業式には全校生徒が参加するので講堂の出入口は必然的に混雑する。

その主な原因は生徒誘導のため風紀委員と顧問の十倉先生がその付近に居るからだと思うけど。

長蛇の列と化した生徒達の中に私と絵理も一部となり、ゆっくりと進む列の流れに身を任せながら雑談をしていた。

しかし、その最中でも私の胸には相変わらず嫌な予感と不安が渦を成している。

「あーあ、早く帰りたいのにＨＲで委員会を決めるなんて……」

「そうだね、私も用事があるからＨＲは短い方が嬉しいかも」

「あれ、今日は一緒に帰れないんだ？」

「ごめんね」

「ううん、気にしないでよ。適当にブラブラしようと思ってただけだから」

私達は都合のつく日は大抵一緒に帰宅していたので、ダメな日の引き際はアッサリしている。

今回も特に気にした様子のない絵理は、次に委員会についての話題を振って来た。目が輝いているのは話題の提供元が六井先生だからだろう。

人並みにはミーハーな反応をする絵理だけど意外にも美形な人達の前で騒いだりした事はない。何でも美形は観賞用らしい。雑誌に載っているモデルを見てカッコイイと言うに留まる感じだろうか。

と言っても美形が好きなことには変わりないので、好きになる人

は昔から「ちょい美形」な部類だった。妙な矛盾だけど、好みなら仕方ないと思える。

「六井先生が担任だから退屈なＨＲも楽しみだなぁ！　でも風紀委員にだけは入れないんだよね」

「生徒会や風紀は指名制だからね。絵理は委員会に入るの？」

「ううん、面倒だからいいや。そう言う加奈ちゃんは入りたい委員会でもあるの？」

「私も委員会には入りたくないかな。……まぁ、文化委員には少しだけ興味があったけど」

「あはは、私達って相変わらずやる気がないね。でも加奈ちゃん、――――文化委員なんてあったっけ？」

「……え？」

首を傾げている絵理の言葉に、私の足がピタリと止まる。

周りから迷惑そうな視線を向けられ、絵理が慌てて私の手を引いて再度前に進ませ始めた。でも私の思考は固まったままだ。

絵理は一年生の時に委員会に所属していたから私と比べると他の委員会のことに詳しいはず。

文化委員ではなかったけれど少なからず行事で繋がりを持つ委員会を忘れているなんて変だ。それも存在ごと忘れるなんて。

加奈ちゃん？　と引いてくれている手を左右に振って私の意識を自分に向けさせた絵理に、私は声が震えそうになるのを必死に堪えて口を開いた。

なんちゃって、冗談だよ！　と明るく絵理が笑ってくれることを心の何処かで期待していた。

「ぶ、文化委員がなくて、誰が創立祭をまとめるの？」
「生徒会と『創立祭実行委員』に決まってるじゃない。夏休み前にクラスから実行委員を一人選んでクラス出店の準備や生徒会からの連絡等を受けたりする一時的な役割の。去年の創立祭もそうだったでしょー？」
「あ、え……そ、そうだっけ？　あは、ははは、ど忘れしてたみたい」

ドクンドクンと嫌な音で心臓が鳴る。音が大きすぎて痛みさえ伴っているような気がした。
私が知っている文化委員会が存在せず、私の知らない創立祭実行委員なるものが存在する矛盾。
文化委員会がないということは四宮先輩が務めている文化委員長という役職も存在しないということだ。

「ねぇ、絵理」
「ん？」

もうすぐ講堂の出入口に差しかかるので、人と人との密着度が上がって絵理と距離が少し近くなった。
何となく周りに聞かれてはいけない気がして、さっきより声を小さくして私は絵理に尋ねた。

もし私の嫌な予感が当たるという状態が続いているなら、これ以上は聞きたくない。でも確かめなくてはならない。

お願いだから、私の質問に首を縦に振って欲しい。

「三年の四宮樹里先輩って、知ってる……？」
「しのみやじゅり？」
「すごく綺麗な女の先輩なんだけど、知ってる、よね？」
「しのみや、篠宮、志野宮……うーん？」

知らないなら、知らないでも構わない。
もしかしたら先輩は姫川さんが来るまでは目立たないようにしているかもしれないから。
この間の一年も、先輩が姿を現したのは創立祭が終わってからだった。例え文化委員が無くなっていたとしても、それに代わる実行委員があるなら先輩が関わってくるかもしれない。

だから、たった一言で済む「知っている」「知らない」以外の言葉を返さないで。

「あ。『しのみや』違いで生徒会監査の四宮宰（しのみやつかさ）先輩なら分かるけど」

ヒュッ、と自分の咽から息を呑んだ音がした。
予想していた返答以上に意味をうまく解釈できない言葉を耳にして、視界が一瞬歪む。

いつのまにか講堂内に入っていたようで、学年別に分けられた席へ移動して私と絵理は隣り合わせに座っている。

ふかふかの椅子に体が沈んで反動によって押し返されると自然に言葉が零れ出た。

「生徒会、監査の、四宮先輩……？」

「そうだよ。会長や副会長も素敵だけど四宮先輩は独特の雰囲気があって特別って感じ！　さすが一年生で生徒会、二年生で風紀委員に所属しただけあるよねぇ」

「――うそ、それ、先輩と同じ……？！」

「もしかして加奈ちゃん、四宮先輩のこと知らないの？　もー本当にそういう事に興味ないんだから！」

ペシペシと私の二の腕あたりを二度叩いた絵理は視線を講堂の舞台に向けた。

私も同じように舞台に目を向けると、始業式の終わりに発表される今年度の生徒会役員達が集まっているのが確認できた。

生徒会と風紀委員の紹介からどちらかの顧問が進行役を引き継ぐので、中には顧問の六井先生の姿もある。風紀顧問の十倉先生の姿がないのは未だ講堂の出入口付近で生徒の誘導をしているからだろう。

「えーっと、四宮先輩は生徒会だから舞台の近くにいるはず……あ！」

フラフラと彷徨わせた視線をある場所で停止させ、子供がやるような仕草でその方向を絵理は指差した。

遠方とも言える私達の位置から彼等の顔までハッキリ識別するに

が無理がある距離だ。
だけれども、絵理の言う『四宮先輩』が私の知っている人と違うことは一目瞭然だった。

「会長と副会長の間にいる人が四宮先輩だよ。あの三人って一年の頃から凄く仲良しなんだって」

なぜなら、絵理が指差した先にいるのは会長や副会長と並んでも特に差がない身長を持つ『男の人』だったのだから。
栗色の長いストレートの髪にコバルトブルーの瞳を持つ四宮樹里先輩とは全く違い、チョコレートブラウンの髪をした容姿の整った男の人。

――違う。私はこんな人を知らない。
この人は私が知っている『四宮』の姓を持つ人ではない。

でも絵理はこの人が『四宮』だと言う。一年で生徒会、二年で風紀委員を務めて三年の今年には生徒会監査としての発表を舞台近くで待つあの人が、『四宮』の名を持つ先輩だというのだ。
何で私の知っている四宮樹里先輩と同じ肩書を持っている人が存在するのか、全く意味がわからない。
文化委員会という生徒会や風紀に次いでの権力を持つ委員会が消えている意味も、あまり公(おおやけ)にされていなかった生徒会監査という役職が当然のように認識されているのも不可解だ。

知らない。こんな未来なんて私は知らない。
知る筈がない。だって私がつい先日取り戻した記憶の中に存在し

ていたのは、私を『相棒（パートナー）』と呼んでくれて、半永久的に続く一年を抜け出す方法を探そうと誓い合った四宮樹里先輩なのだから。

「知らな、い……。し、四宮宰（しのみやつかさ）なんて人、私は知らないっ！」

焦りと不安で掠れ切った私の声は、始業式の進行を担う教師が開始を告げた声に掻き消されてしまった――。

大きな違い（後書き）

消えた四宮樹里。現れた四宮宰。
この変化が指し示す意味とは……？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6758x/

ジュディハピ！

2011年10月30日04時37分発行